

---

# 超次元学園へようこそ！！

真王

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超次元学園へようこそ！！

### 【Nコード】

N3269W

### 【作者名】

真王

### 【あらすじ】

ここはハチャメチャで尚且つ楽しい不思議な学園。その名も超次元学園である。そしてそれはこの学園で生きる生徒と教師達の物語。

『黒龍のリリカル銀魂ライダー〜異世界鎮魂歌〜』

『リインの魔法少女リリカルなのは〜とある兄妹の転生物語〜』

『鳴神ソラの大乱闘スマッシュハーツブラザーズ出張版』

『ケンのHERO's EPISODE〜ヒーローズエピソード〜』

『風花のリリカルなのはStrikerS』〜The las

t of crime〜』

『なめ猫の』FFI外伝「心ある者」『』

『ユートピアの』IS>インフィニット・ストラトス<黒き牙と永遠の月』『』

『風音 椿の』超次元ゲーム ネプテューヌmk2 Goddess of lost memories』『』

『十六夜アミナの』魔法少女リリカルなのは ～とある少女はチート持ち』『』

のキャラクター達が集まっています！

## 超次元学園構図（前書き）

初めに構図から。

## 超次元学園構図

理事長：真王

裏理事長：邪王

教師：銀八（担任）、イストワール（副担任）、ケイ（数学）、チカ（歴史）、ミナ（国語）、グレイ（???）、神（<sup>リイン</sup>???）、タバネ（化学）、束（科学）、チフユ（体育）、源外（物理）、クロノ（警備長）、ユーノ（図書室係）、スカリエツティ（科学員）、ドクターマリオ（医者）、アーカード（副警備長）、アーク（石だけど警備員）、ディケイト（給食係）、フィリア（給食係）、イシユタル（数学）、ドーン（科学）、エンツ（国語）、ダヌ（警備員）、リルマ（保健体育）

裏教師：勇斗、勇華

生徒：銀時、新八、神楽、桂、エリザベス、月詠、九兵衛、辰馬、猿飛、近藤、土方、沖田、山崎

なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、アリシア、ヴィヴィオ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、セツテ、ディエチ、ノーヴェ、ウエンディ、オットー、ディード

ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフ、ネプギア、ユニ、ロム、ラム

理樹、恭介、鈴、真人、謙吾、小毬、来ヶ谷、クド、葉留佳、美魚  
ゆり、音無、奏、日向、直井、ユイ、松下、高松、野田、藤巻、大  
山、TK、椎名、岩沢、入江、関根、ひさ子

哲志、直美、世以子、良樹、あゆみ、繭、サチコ、遼、雪、時子

ラハール、エトナ、フロン、プリニー、カーチス、アデル、ロザリ  
ンド、マオ、ラズベリル、アルマース、サファイア、ヴァルバト  
ー、フェンリツヒ、フーカ、デスコ、エミーゼル、アルティナ

レーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア、リアス、イツセー、カ  
イム、アンヘル、レオン、ユウカ、ナリア、ガレーナ、レシア、ヤ  
ルオ、ルシアス、ルーシア、アルテス、マナ、タマネ、リリン、レ  
ムナ、アリア、ザツク、ムツリ、ヒメラ、レグナ、ラート

ビビ、リオン、シャリアローゼ、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、  
さくら、エール、コヨリ、メア、セレス、ソラ、リリス、(ソラ)  
アリス、アリア、セイバー、ライホース、ヤミ、統夜、達哉、遊輔、  
相川(咲夜)、メアリ、零斗、アリス(チェンバース)、セイタ、  
マリオ、ルイーダ、ピーチ、クツパ、ヨツシー、カービィ、オリマ  
ー、ネス、リュカ、フォックス、ファルコ、ピット、オリマー、ル  
カリオ、スネーク、ソニック、リュウケンダー、ソロ、冥王、銀次、  
明久、ムッツリーニ、ダークエリザベス、エリア、ギル、カイト、  
ミリア、友樹、彩香、慎吾、椋、楓、フウ、ステラ、セレナ、ベル  
仁哉、竜虎、ハジメ、天音、夢乃、ユリナ、カイン、セリア、ホラ  
ーロード、エル、オックス、コープス、ローグ、レルシア、アギス、  
レイヴィス、ベアトリス、レイシア、隆次、ユリス、イヴ、龍華

## OSGとKOS(前書き)

真王「学園のサブキャラのようつでメインキャラの10人を紹介しま  
す」

10人「誰がサブだ!!」

## OSGとKOS

〈ゆうだい  
雄大〉

髪：ボツサリした茶髪

目：黒

服：何処にでもある学生服

年齢：20歳

3サイズ：なし

体重：48キロ

性別：

種族：人間

好き：ゲーム、楽しいこと、勝負

嫌い：楽しくないこと、負けること

性格：負けず嫌いな正義感のある性格

詳細：男の紳士軍団、OSGの総隊長。負けず嫌いで真っ直ぐな思考の持ち主。KOSメンバーである理奈とはライバル関係であり姉弟関係もあると言う。本人いわく、理奈は義理の姉だと言うが実は血のつながった姉だという。

〈鉄破〉

髪：黒の短髪

目：黒

服：紫のTシャツとジーパン

年齢：24歳

3サイズ：なし



体重：55キロ

性別：

種族：人間

好き：肉、戦い、拳と拳の喧嘩

嫌い：武器使う奴、卑怯者

性格：バカだが根が真つ直ぐな感じ

詳細：OSGの特攻隊長。喧嘩っ早くメンバーの右腕として役立つ。その分学力は低いのが玉にキズ。昔は世界に名をとどろかせる極悪不良だったが、超次元学園に喧嘩売って敗北。その後雄大の説得と勧誘により、彼は雄大に忠誠を誓い、ここの生徒となった。

（ルーシュ）

髪：黒

目：紫

服：アツシユフォード学園の服

「トギアスより

年齢：19歳

3サイズ：なし

体重：43キロ

性別：

種族：人間

好き：ネネリー、チエス

嫌い：ネネリーを侮辱兼傷つける愚か者。

性格：プライド高そうだが仲間思い

詳細：OSGの参謀員。とある貴族の息子だが父親のやり方に嫌気がさして妹のネネリーと共にこの超次元学園へ住み着いた。ギアスのルーシュみたく学力と推理力がぴか一高い（だが体力が無いのが玉にキズ）。そしてネネリーべっতারいのシスコンである。

くレイ

髪：蒼髪

目：青

服：何処にでもある普通の服

年齢：16歳

3サイズ：無し

体重：43キロ

性別：男の娘

種族：人間

好き：仲良くなること

嫌い：ピーマン、苦い物、着せ替え人形にされること

性格：気が小さく臆病気味な性格

詳細：OSGの下っ端的な奴。周りからいじめにあうことが多かったが雄大達を引き取ってからその心配はなくなつた。同じ男の娘であるプリアとは仲良しで、彼の様をめげずに頑張るところも見習おうと努力している。

く殺樹

髪：黒

目：金色（左目は眼帯）

服：袖なしのワイルドな服

年齢：24歳

3サイズ：無し

体重：55キロ

性別：

種族：人間

好き：女の泣く姿、辛い物

嫌い：屈辱を受けること

性格：沖田よりもサディスト

詳細：OSGの危ない戦闘員。KOSの殺那とは切っても切れない永遠のライバル。常にコンバットナイフを所持している。実はある施設で戦闘教育を受けたらしいが…

（理奈<sup>りな</sup>）

髪：癖つ毛のついた真紅のロング

目：黒

服：ハイスクールD×Dの女子制服

年齢：21歳

3サイズ：98 / 56 / 83

体重：血で汚れている

性別：

種族：人間

好き：綺麗な物、かっこいい男

嫌い：汚い奴、勝負に負けること

性格：負けず嫌いな勇気のある性格

詳細：可憐なる乙女戦隊、略してKOSの総隊長。雄大と同じくまっすぐな性格を持つ。実は雄大とは姉弟関係を持つ。活気な性格なのは親譲りのせい。

（雷華）

髪：金髪。黒のヘアバンドをしている

目：青

服：女子学生の服

年齢：21歳

3サイズ：109 / 55 / 82

体重：殴られた。

性別：

種族：人間

好き：戦い、拳と拳の喧嘩

嫌い：武器使う奴、卑怯者

性格：アホだが絶対に曲げない性格

詳細：KOSの特攻隊長。喧嘩の雷華と呼ばれた異名を持つ女性生徒。同じ喧嘩好きの鉄破斗は馬が合い、事あるごとに勝負しあっている（ほとんど引き分け）。堅苦しいのは苦手で人前で躊躇なくボタンを全て外すらしい（ブラはつけてない）。

（メリアーナ）

髪：ベージュのセミロング

目：淡い青

服：閃乱カグラの春花の服

年齢：22歳

3サイズ：107 / 56 / 84

体重：化学薬品がカビっている

性別：

種族：人間  
好き：実験ごと、面白いこと  
嫌い：爆発（実験失敗の時）  
性格：マッドで珍しいものを見ると実験したくなる。  
詳細：KOSの科学員。実験マニアなマッドサイエンティスト。ド  
ーンやタバネを師匠と読んで修行という名の実験をしているらしい。

く麻梨乃く

髪：星の首飾りをつけた茶色のセミロング  
目：緑  
服：学生服  
年齢：19歳  
3サイズ：塗り潰されています  
体重：こちらも  
性別：  
種族：人間  
好き：本、読書、料理  
嫌い：運動、規則正しくない行為  
性格：まじめで頑張りや。  
詳細：KOSの参謀役を務める風紀委員。学力抜群でルーシュとい  
いとこ勝負。だが体力もルーシュ並みに弱い。

く殺那く

髪：緑のセミロング

目：赤

服：傷だらけの短パンとボロ着いた黄色い胸当て

年齢：22歳

3サイズ：104/55/83

体重：切り刻まれています

性別：

種族：人間

好き：悲鳴、ホラー映画（特にスプラッター）

嫌い：特にない

性格：サディスト

詳細：KOSの危ない戦闘員。OSGの殺樹とは切っても切れない  
永遠のライバル。こちらも常にコンバットナイフを所持している。

実はある施設で戦闘教育を受けたらしいが…。見た目容体が閃乱カ  
グラの日影と似ている。

OSGJKOS (後書き)

癖のある方々です。

**第一訓・学園の日常ってでら馬鹿騒ぎ(前書き)**

記念の第一話、始まりだぜ！





そして奇麗に着地。

レーティア「フウ、ギリギリセーフ」

???「ギリギリ遅刻だバカ者」

レーティア「いたっ！」

安心するレーティアに後ろ肩黒い髪に黒いスーツを女性教師・チフユ・オオムラが彼女を教簿で叩く。

チフユ「全く、一体何があつたら遅刻するのだ？大方誰かを意識し過ぎて眠きも失せたか？」

レーティア「え！？あ、イヤそんなことは…」

ジャンヌ「ないですよそんなこと、アハハハハハ！」

ジト眼でにらむチフユにレーティアとジャンヌは誤魔化す。

レーティア「じゃ、じゃあ私達は教室に戻りま〜す！！！」

と2人は逃げるように教室へ行つた。

チフユ「・・・まったく」

チフユは呆れ交じりのため息を吐いた。

教室

生徒達が楽しく会話をしていた。  
その上、

レーティア「やっと着いた…！」

ジャンヌ「ハア…ハア…みんなおはよ〜」

少々息切れに近い感じで入ってきた二人。

なのは「おはようレーティアさん、ジャンヌちゃん」

フェイト「でもどうしたの、いっぱい汗かいて」

はやて「大方誰かを意識しすぎて眠れなかったか？」

そんな彼女らにリリカルなのはのメインヒロインズがそれぞれあいさつし、心配し、悪戯心でいう。

レーティア「そ、そんなんじゃないわよノノノノ」

ジャンヌ「私は単なる寝坊しちゃって…」

レーティアは顔を赤くして否定し、ジャンヌはバツの悪そうな顔をして言う。

ナリア「ジャンヌちゃん」

ビビ「おっはよ〜」

ジャンヌ「あ、ナリアちゃんビビちゃん」

銀髪の少女・ナリアと、髪は白っぽい銀色の長髪のセミロング、右目が蒼、左目が銀色のオッドアイの少女・ビビがジャンヌに挨拶するよ、

ジャンヌ・ナリア・ビビ「いえ〜い！〜い！〜い！〜」

三人そろってハイタッチ。  
三人はとっても仲良しのようなようだ。

ギルシア「お前が遅刻ギリギリなんて珍しいな」  
レーティア「そんなことないわよ。ギルシア」

グラサンの男・ギルシアが珍しそうな顔をしてレーティアに言う。

レーティア「あなたのことを考え過ぎて寝つけにくかっただけ／＼／＼」

顔を赤くして横から抱きつく。

2人は恋人関係らしい。

銀時「おいレイン、今度ブドウパフェが発売すんだってよ。行くか？」

レイン「もちろんだ銀時」

甘党の銀時とレインは行く約束をする。  
影で彼の自称彼女のさくらがじーとみている。

咲夜「ユー君？」

ユーノ「さ、咲夜…」

咲夜とユーノはいつでもラブラブだ。

ネプテューヌ「そう言えば昨日のアニメの再放送最終回だったね」  
ネプギア「『エースにほえる』…でしたっけ？」

ベール「なんですって！？く、私、無念ですわ…」

ノワール・ユニ「何がよ…」  
ブラン「……………」

ネプテューヌがネプギアとアニメの再放送の話をしているとベールがショックを受け、ノワールとユニが突っ込む。  
ブランは興味なく本を読み、双子のロムとラムは遊んでいる。

スネーク「……………」

ルカリオ「何をやっている？」

スネーク「いや、ちよつと食事をだな」

ルカリオ「段ボールに入ったままでか!？」

教室の端っこで段ボールに入っているスネークとルカリオが話し合っている。

スネークは段ボールが大好きなのだ。

アリス「ソラ、今度ある恋愛映画何だが一緒に来るか？」

アリア「ニヤア・・・ペットショップ…」

リリス「いえいえ、ここは間を取ってファミレスにしましょうよ」

ソラ「なんの間もないしそんなに引っ付くな」

いつもながらアリス、アリア、リリスは学園一のイケメン、天道ソラに引っ付き状態だ。

統夜「違うぞ達哉、北斗百裂拳の構えはこうやって…」

達哉「イヤそれは無拍子の構えだよ」

シャル「楽しそうね」

統夜と達哉がなにかポーズをしていてシャルが呟く。

銀八「おーい座れ、お前らは修学旅行で騒ぐ生徒ですかこのやる」

と扉から現れたのは担任の銀八先生だ。  
なぜか隣に同クラスのベールが立っている。

銀八「え、実はベールのたて笛を盗んだ何者かがいるらしい。正直に手をあげる。嘘でもいいぞ。今ならベールがケツの穴をつ込んで『翼をください』を吹けたら許してくれるって」

それは100%無理なことだ。

マリオ「先生！そんなことしたら、一生翼なんてはえません！マッチの名曲『けじめなさい』にしてください！」

銀八「分かった。マッチの名曲『ケツモダサイ』でいこう」

銀八は思いつきり駄目な発言をした。

ネプギア「先生。生徒の前でそんな発言は止めてください。読者見てるんですから」

ノワール「っていうかそんな曲ないわよ！」

銀八「ったくしゃあねえな。誰か笛貸せ。俺が吹く」

ネプギアとノワールが突っ込む。

銀八は頭をかいたあと、神楽がなぜかちくわを取り出す。

神楽「先生。私のあげるよ。壊れてファの音しか出ないけど」

銀八「壊れてんのはテメエの頭だ」

ルイージ「それ以前に笛じゃないし」

根本的に大きくずれている神楽であつた。

ネプテユーン「ねえベール。チカさんに頼めば笛が出るんじゃない？」

ベール「そうですか？」

ユニ「物は試しよ」

ネプテユーンのアドバイスでチカを呼んでみた。

チカ「ん〜ま！お姉様の笛を盗むとは言語道断ですわ！」

ベール「そう言うわけだから、笛は出せるかしら？」

怒りぶんぶんのチカにベールは言う。

チカ「大丈夫ですわ！こんなこともあるつかと私笛を2本持つてるんですの！」

.....

銀八「なんでテメエが2本持つてんだ？」

ベール「チカ、もしかしてあなた……」

チカ「え？いやですね。おねえ様の愛を深めるために盗みとつてたわけじゃ……あ」

ベール「ちよつとこちらにいらつしやい」

犯人はチカであり、ベールはチカを引つ張つていく。

その後チカの悲鳴がこだました。

ここでアイエフが一言。

アイエフ「転校しようかしら……」

第一訓・学園の日常ってでら馬鹿騒ぎ（後書き）

やっぱりこうでなくっちゃな。

銀八「次回『ズルズルもんなんてほとんど嫌がらせ』テイクオフ」



第二訓：ズルズルもんなんてほとんど嫌がらせ（前書き）

一言つぶやき

真王「ちよつとズルズルボールでパンツをぬらすのよくないと思わないか？」

変態共「ズルズルパンツサイコーー！！！！」

真王「駄目だこいつ等……」

## 第二訓：ズルズルもんなんてほとんど嫌がらせ

ある日ヴィータがゲートボールハンマーを手に持つてる時だった。

ヴィータ「さして、今日はどんなショット撃とうか」

とワクワクしながら進んでいくと、

ヴィータ「……………なんだこれ？」

何かヌメヌメと濡れているボールがあった。  
手に取ると本当にヌメっている。

ヴィータ「……………まあいいか」

ヴィータは特に気にせずゲートボール場へ向かった。

## 理事長室

真王「よう銀八先生。どうだいこの学園は？」

椅子の上で座っている超次元学園理事長・真王が目の前にいる銀八に言う。

銀八「まあ、ぼちぼちかな……………」

曖昧気味な答え方をする銀八。

真王「まあ入って半年だ。まだ日が浅いからな」

銀八「じゃあ早速。この校内の美女は？」

真王「美女？それはだな・・・」

リンデイ「私のことですか？」

といきなり教師のリンデイが入ってきた。

銀八が唾然する。

銀八「えつと、理事長。校内の美女は・・・」

リンデイ「あら、坂田先生。そんな美女なんて、照れるわ」

と赤くなる。

銀八先生と真王はリンデイから離れて隅に移動する。

銀八「おいおい、あの先生、自分こそが美女だと信じて疑ってない」

真王「見た目よくだって結局中身は子持ちのばあさんだよ。自分が若いと自惚れてりゃ若いと思ってるのか？第一鏡見る、そして現実の自分と向き合え」

銀八「おいイイイイイ！！それは本人の前では言わない方がいいって！！じゃないと・・・」

と言い掛けようとする時、

突然、地震が起きる。

銀八「じ、地震！？」



ヴィータ「おお、これなら通った跡が見えて、参考になる」

すると、シグナムとシャマルがやってくる。

シャマル「ヴィータちゃん、また提出物を・・・」

シグナムとシャマルは又メ又メしたボールを見て啞然する。

シグナム「ヴィータ、何だそれは・・・」

ヴィータ「今朝、拾った」

シャマル「何で、持ってきたの・・・」

ヴィータ「ゲートボールに丁度良かったから」

シグナムは又メ又メしたボールを拾い、

シグナム「捨てろ」

と投げ捨てようとするが、

ヴィータ「何するんだよ」

シグナムとヴィータはボールの取り合いをする。

シグナム「こんな物、捨うなー！」

シャマル「そうよ、気持ち悪いわよ」

ヴィータ「誰にもやらないから」

シグナム「やらんでいい、捨てろ！」

言い争いが続くが、チャイムが鳴る。

シグナム「あつ、授業に遅れる」  
シャマル「大変！」

シグナムはボールを捨て、シャマルといっしょに教室に戻るため立ち去る。

ヴィータ「待てよー」

ボールを拾い、教室に行く。

教室

銀八「よし、授業を始めるぞ」

と相変わらずな銀八はたばこを吸いながら言う。

ネプギア「先生、タバコは駄目です」

銀八「ちげーよ、これはレロレロキャンディーだ」

良樹「舐めて煙が出るキャンディーなんて聞いたことねえぞ」

銀八「当たり前だ、これは俺が作ったもんだからな」

ポンつとキャンディーを取り出して見せびらかす銀八。

奏「というより甘いものを授業中に持つてくるのは駄目なんじゃ？」

銀八「いやゝ。俺、定期的に甘い物を摂取しなきゃいけないの」

理樹「通らないよそんな理屈！」

何事も無かったように、授業を続ける。

ブラン「…？ヴィータ、鞆濡れてるけど…」

ブランがヴィータのかばんに指摘する。

ヴィータのかばんにはぬめぬめした何かが付いていた。

銀八「オイヴィータ・・・お前…」

ヴィータはしまったというような顔をする。

やがて銀時はこんなことを言った。

銀八「入れてるのか？トイレの時にアレが着いちまった濡れたパンツ…」

ドゴスツ！！

失礼な言葉なのでヴィータにハンマーで殴られた銀八。もちろん血も出る。

銀八「何すんだこのやる、生徒でも許せねえぞ」

ネプギア「それ以前に先生の発言が許せません」

ネプギアは赤くなりながら突っ込む。

他の女子生徒達も同意見だ。

銀八「だって、おしっこならびしょびしょ。アレだったら、又メヌメだよ」

ヤミ「先生、場を考えて発言してください！えっちいのは嫌いです！」

銀八「わかったわかった」

再びヴィータに振り向き、

銀八「否定する事は、凶星か？」

ヴィータ「違う。パンツは履いてる。このヌメヌメ跡は、これだよ」

鞆からヌメヌメボールを取り出す。

銀八先生とクラスメイト達は啞然する。

銀八「何だよ、それ・・・」

ヴィータ「今朝拾った、ゲートボール」

銀八「こんなズルズルしたボールがゲートボールなわけないだろ」

ヴィータ「ズルズルじゃない。ヌメヌメだよ」

銀八「ズルズルだよ」

ヴィータ「ヌメヌメだよ」

銀八「ズルツとしてそうだから、ズルズルだよ」

ヴィータ「ヌメっとしてるから、ヌメヌメだよ」

銀八「ズルズル」

ヴィータ「ヌメヌメ」

アイエフ「おい、喧嘩の内容が変わってるわよ」

アイエフのツツコミに二人は気づく。

銀八「何だよ、これ？。拾うなよ・・・」

ヴィータ「練習に丁度良いから・・・」

銀八「どんな練習するんだよ？。コレは没収だ」

銀八先生はヌメヌメボールを取り上げる。

ヴィータ「ああ・・・」



ヴィータは落ち込む。

銀八「はい、授業再開するぞ」

こうして、授業再開する。

が、

ユウカ「先生、怪しい奴拾ったんだけど…」

同じクラスのユウカが小と書かれた柔道着を着た男を連れてきた。

銀八、銀時（あれ？どっかで見た様な…）

ネプテューヌ「どちらさん？」

小林「おッス！オラ小林、ワクワクするぞ！」

ユニ「全然ワクワクの欠片もないわよ」

小林「オッス。オラ腹減ったぞ」

クツパ「図図しいなこいつ…」

小林のやり方や言動に図図しく思う物も…。

明久「それじゃあこのかつ丼を…」

明久がかつ丼を渡す。

小林はバクバク食べる。

レーティア「っていうか、なにしに来たの？」

小林「実は…」

青年説明中・・・

ヴィータ「なんだって！？あの又メ又メボールを返せだと！？」

銀八「いや、ズルズルボールだ」

コンパ「何ですか、ズルズルボールって…」

小林「フツ集めるとズルズルした籠、ズルズ籠が現れ、願いや欲しい物をズルズルにして叶えてくれるだ」

リユカ「何それ……。ほとんど嫌がらせじゃないですか」  
ソラ「そんなもの集めてどうする」

シャマル「欲しい物をズルズルにしたら、手に入れる意味がないわ」  
スバル「凄いや」

ティアナ「イヤ、凄いつて問題じゃないでしょ！」

ヴィータは銀八先生が持ってきたズルズルボールを見つめる。

銀八「ヴィータ、返してやったらどうだ」

シャマル「そうよ。こうして、持ち主がいるんだから」

ヴィータは悩み込む。

銀八「一々悩む必要ねーだろう」

するど、

ゴゴゴつと、大きな物音がする。

なのは「な、何!?!」

スバル「地震」

ティアナ「揺れてないでしょ」

シグナムが外を見ると、

シグナム「な、なんだアレは!?!」

全員も外を見る。

上空から巨大な円盤が浮いていた。

段々と学校に近づいてくる。

銀八「アレ、アレもどこかで見たことあるぞ」

ネプテューヌ「うわーっ、巨大UFOだ」

ラム「宇宙人の襲来!?!」

アイエフ「おーい!、学園物語にUFO出しているの!?!」

超次元学園の外側

巨大UFOから声が聞こえる。

????「ホツホツホツ、聞こえますか、地球人諸君」

小林は顔を出す。

小林「あいつめ…」

焦りのあまりか、歯ぎしりする。

???「我が名はブリーザ。地球人の代表はいますか？。お話がしたいのですが、出て来てくれませんか？」

教室内

皆は状況を把握できず、戸惑ってしまふ。  
そんな中、小林は口を開く。

小林「奴は、悪の帝王ブリーザ。強大な力の持ち主で、宇宙征服を企んでいるんだ」

ジャンヌ「なんでその悪の帝王がこのコメディイに出てくるのよ…」

小林「奴の目的は、ズルズルボールだ」

銀八「えっ、何でもズルズルにするような玉が欲しいの！？悪の帝王は！？」

小林「オラはそんなブリーザの野望を阻止するため、7つのうち、1つを奪って、この地球に逃げたんだ」

達哉「いやブリーザの野望を聞いてねえよ」

小林「でも、その時にグリーンが殺された。オラ、ブリーザを倒して、残りのズルズルボールを集めて、グリーンを生き返すんだ」

シグナム「あおう、水を刺すようで悪いが…」

小林「みんなの力をオラに分けてくれ！！」

ソラ「聞いてねえし。つか、俺らを巻き込むな」

スバル「あ、理事長が…」

と指を指す。

銀八先生らはスバルの指す方を見る。

### 超次元学園の外側

真王は歩き出し、UFOの所に行く。

UFOから人型の宇宙人悪の帝王ブリーザが降りてくる。

真王は興味深そうな顔をする。

ブリーザ「あなたが地球人代表ですか？。なかなかの風格ですね」

真王「どうも、代表は代表でも、この超次元学園の代表ですけどね  
……」

ブリーザ「では、聞いてよろしいでしょうか？。ズルズルボールを  
知りませんか？」

真王「ズルズルボール？。あの濡れたボールか？」

ブリーザ「何と知っているのですか！ならば話が早い。私に渡して  
もらいましょうか」

真王「やだね。っていうか小林が持つてるから渡さないと思うぞ」

### 教室内

二人の会話を見守ってた銀八先生らは、

ネプギア「先生、このままじゃ理事長が…」

銀八「さっさとズルズルボールを渡せばいいだろう」

シャマル「アレ、小林さんがいないですけど」

なのは「ズルズルボールも無い!？」

ヴィータ「あの野郎、逃げやがった」

ヴィータは怒って、教室を出て行く。

アリス「どこに行く?」

ヴィータ「ヌメヌメボールを取り戻す」

銀八「だから、ズルズルボールだって」

アイエフ「だから、そーゆう問題じゃないでしょ!」

プリア「あつ、ブリーザが!」

皆は外側を見る。

### 超次元学園の外側

ブリーザは凄まじい覇気を放つ。

真王は動じない。

ブリーザ「さあー、出しなさい。さもないと、この地球を花火にしますよ」

レジラス「やってみるんだな。この学園を舐めたらひどい目にあうぜ?」

教室内

スバル「先生、不味いですよ」

銀八先生は考え込み、

銀八「なのは、全員グラウンドに呼んで来い」  
なのは「えっ？」

超次元学園の外側

ブリーザ「痛い目にあう？あうのはあなた達ですよ？」

真王「いんやあんただよ。なぜならこの学園は」

銀八「つわ者揃いみたいなことだ」

ブリーザは後ろからの声に驚き、振り向く。

銀八先生と超次元学園生徒達（ヴィータを除いて）がやって来る。

真王「来たか」

ブリーザ「何者ですか？」

銀八先生は二人の間に入って来る。

銀八「理事長、コイツは宇宙征服を企む悪の帝王です。ズルズルポールを渡しても、地球に危害を加えます」

真王「やっぱりな」

ブリーザ「ほーっ、私のことをご存知ですか」

銀八「小林から聞いている」

ブリーザ「そうか、奴も此処にいるのか」

銀八「ああ、今でもズルズルポールを持って逃げている」

ブリーザ「そうですか。ならば、探させて貰いますよ」

銀八「悪いが、そーはさせねー」

ブリーザ「何？」

銀八先生は生徒達の前に行く。

銀八「諸君、この悪の帝王ブリーザを倒すんだ」

生徒達「えーっ!?!」

真王「あ、押し付けた」

ブリーザ「この私を倒す？」

ブリーザは眉をひそめる。

生徒達は当然戸惑う。

なのは「先生、何で私達が…」

銀八「それはお前達が超最強な存在だからだ」

ネプギア「先生、そんな理屈は出してはいけないと思います。強いですけど」



銀八先生はため息をつき、

銀八「いいから倒してこい。それがお前達の中間試験だ」  
生徒達「えーっ、中間試験!?!」

銀八「ブリーザを倒したら、中間試験は合格にしてやるよ」

生徒達は相談しあい、

ノーヴェ「ヨシヤー、ラッキー!」

ウエンデイ「コレは楽っす!」

セイン「勉強せずに済む」

トーレ「先生の作る試験をやるよりはましだな」

統夜「鉄人の補修よりかはましだな」

明久「確かにね…」

マリオ「頭使うより簡単だな」

クツパ「我が輩も暴れるのだ」

冥王「実験台にするなの!」

ソラ「やれやれ、先が思いやられるな」

ビビ「肩慣らしにくたばりなさい」

神楽「抹殺アル!私が合格を取るネ!」

リイン「リインとアギトは小さいですけど…」

銀八「特攻で敵の股間。つまりおんんを狙え」

アギト「特攻つて、死ねつてか!?!」

リイン「(赤くなりながら)しかもおんんなんて…」

やる気を沸く奴も居れば、困る奴も居る。

真王「銀八先生、よくもまあ都合のいい子と考えるね」

銀八「理事長、地球滅亡と中間試験、どっちを取るんですか？」  
真王「地球側だ。そっちか消えちゃ試験が出来ん」  
銀八「あ、それもそうか」

銀八は一本取られたかのように言う。

ブリーザ「ええい、早くしなさい」

イライラしているブリーザが言う。

銀八先生はブリーザの方に振り向き、

銀八「てめーら、やっちまえー！」

生徒共はブリーザに立ち向かう。

ブリーザ「こしゃくな。者共！」

ブリーザの合図でUFOから沢山のブリーザの手下が出てくる。

ブリーザ「やってしまいなさい」

手下達「オオーッ」

超次元学園とブリーザの手下達の攻防が始まる。

手下1「オオーツ、可愛い娘ちゃん」

手下2「俺らと遊ばない？」

四、五人がなのはに向かう。

なのはは笑顔で、

なのは「ショートバスター」

手下達「ギャーッ」

ショートバスターで瞬時に手下達を倒す。

フェイト「ハーケンセイバー」

手下達「グワーツ」

束になって、ハーケンセイバーでぶっ飛ばされる。

はやて「アーテム・デス・アイセス」

地上に居た手下達は叫ぶ暇なく、凍らされる。

スバルは手下達の間ウィングロードを掛ける。そして、ウィングロードを走り出し、

スバル「リボルバーナックル」

と次々と手下達をぶっ飛ばす。

ティアナ「シユートバレット」

手下3「うわっ」

手下4「ぎゃあっ」

次々と撃ち落とされる。

シグナムはレヴァンティンを構え、動かない。

手下5「動かないぜ」

手下6「今のうちに、やっちまえ」

手下7「その前に、あのおっぱい触れ」

手下達はシグナムに立ち向かう。

シグナム「紫電一閃」

手下達「ぎゃあー」

瞬時に手下達を一振りで仕留める。

エリオ「ソニックムーブ」

手下達「グワァッ」

高速を生かし、手下達をストラダーで刺したり、なぎ倒していく。

キャロ「アルケミックチェーン」

手下達「うわーっ」

チェーンにより捕縛されていく。

銀時「俺達にこと忘れんじゃねえぞー!!」

神楽「皆殺しじゃあああ!!--!!」

ネプテューヌ「タタっ切るよー!!」



すると、

UFOから一人の影が飛び出す。

銀八先生らは気付く。

影はヴィータの後ろに着地する。

ヴィータが振り向く前に、

????「ぐおー」

ヴィータ「うわーっ」

ヴィータは飲み込まれる。

銀八先生らは驚く。

ブリーザ「ふっふっふっ。よくやりました、人造人間セロ」

銀八「人造人間セロ!?!」

人造人間セロは銀八先生らの方に振り向く。

セロ「我が名はセロ。たった今、人質を捕らせてもらった。返しほしければ、ズルズルボールをよこせ」

ブリーザ「さもないと、溶かしますよ」

銀八先生らは焦る。

セロ「さあー、どうする?」

すると真王がセロに近づく。

真王「ハ・ケ・ヤ!」

ドゴッ！！

セロ「ウゴッ！」

セロの腹に一発ケリを入れる。  
悶えた後のセロは急に吐き気を覚えた。

セロ「は、吐きそう……。オエッッ」

セロはヴィータを吐き出す。

なのは「ヴィータちゃん！！」  
シグナム「ヴィータ！！」

ヴィータ「フッ、喉の辺りで逆流してやったぜ」

ヌメヌメ状態になりながらも、

ヴィータ「よくもやりやがったな……」

ブリーザとセロを睨みつける。

そしてバリアジャケットに変身する。

ブリーザ「私と闘うのですか？。いいでしょう。その無能な、評価  
しましょう」

ブリーザとセロは構え、気を放つ。

その気は地面を崩し、揺るがず。

セロ「後悔するがいい」

ブリーザ「あの世で」

ゼロ・ブリーザ  
「ハアーツ！」

ヴィータに襲い掛かる。

で・・・

一瞬で返り討ちされる。

ブリーザ「ば、馬鹿な…」

ゼロ「我らがやられただど!？」

全員（ヴィータ除く）（弱…）

全員揃ってあっけなさに半目になる。

勝利したにも関わらず、ヴィータはまだ不機嫌だった。

ヴィータ「オイ、まだやられるな。あと二、三発以上足りねえ」

ブリーザ「そうか、貴様はあの女、スーパー地球人の子か…」

ゼロ「どつりで似てるはずだ…」

イメージで表現されるスーパー地球人。スカウターを付けた 中年のおばさん。

ヴィータ「誰だよ、それ。どこが似てるだよ」

ゼロ「ブリーザ、退却だ」

ブリーザ「そーするしかありませんね」

ヴィータ「まちやがね。こんな事して、タダで済むと思ってるのか」  
ゼロ「わかった。残りのズルズルボールをやるう。オエッ」

とズルズルボール6つを吐き出す。



銀八先生らは吐き出す光景を見て、こちらも吐き気がしてしまっほど気分を悪くする。

ブリーザ「皆さん、退却です」

ブリーザとゼロ、そして手下達は急いでUFOに乗り込み、急いで立ち去るのだった。

6つのズルズルボールに最後のズルズルボールを置く小林。銀八先生らはそれを見守る。

スバル「これで、グリリンさんを生きかえりますね」  
ティアナ「でも、何でもズルズルにするのよね…」

多少不安が集まるも、小林は呪文を唱える。

小林「いでよ、ズルズル龍よ。願いを叶えたまえ」

シ〜〜〜ン・・・

しかし、何も起こらない。

なのは「何も起きないね」  
フェイト「どうしたのかしら」

小林はズルズルボールの1つを取り、

小林「こ、これは!?!」

銀八「どうした!？」

小林「ズルズルボールじゃない。ヌメヌメボールだ！」

ティアナ・新八・ジャンヌ・リリス・明久

「わかるかー！ー！ー！！！！」

はやて「どう違うんや」

触ってヌメつと感じた小林がいい、区別の出来ないので突っ込む。  
すると、ズルズルボールが光り出す。

フェイト「あつ、ズルズルボールが」

光るズルズルボールから龍が現れる。

ズルズル龍「我が名は、ヌメヌメ龍」

なのは「えっ、ズルズル龍じゃないの？」

エリオ「わかる？」

キャロ「さあー……」

アリス「汚さ満載だな」

ズルズルとヌメヌメの区別なんてよく分からない。

銀八「何はともあれ、コレで願いは叶え……」

小林「えーっ、ズルズルじゃなきゃ、やだ。やめーた」

銀時「オイ、やめるのかよ。グリリンはどうなるんだよ」

シヤマル「この際、どっちでもいいから」

小林「うーん。よし、ギャルのパンティーをくれー」

ティアナ「っておーい！！何生々しい物を頼んでるのよー！グリリン  
を生き返しなさいよー！」

銀八「ほれ、このズルズルしたパンティーをやるから」

とヴィータのパンツを差し出す。

ヴィータ「それ、私のだろ」

小林「サンキュー」

と小林がヴィータのパンツを持ち逃げする。

ヴィータ「まちやがれー！！！！」

ヴィータは小林を追いかける。

又メ又メ龍「さあー、早く言ってくれ。又メ又メが乾く」

銀八「悪いけど、願いはないわ」

アリス「イヤ、ソラのn「言わせないぞ」チッ」

アリスはソラのアレを又メ又メにして手に入れようと考えたらしいが、遮られた。

ビビ「又メ又メのなの「ちょっとこっちこいや」クソー！！」

ビビも欲望を言おうとしてマリオから逃げだす。

又メ又メ龍「だったら、呼ぶな。私は戻る。願いがあれば、呼べ」

又メ又メ龍は消える。

残された又メ又メボールを見て、銀八先生は、

銀八「理事長。コレ、どうします」

真王「変態ならズルズルの女性を呼びそうだな。私が保管しとこう」  
その後、ヌメヌメボールは超次元学園の倉庫に保管されるのであった。

第二訓：ズルズルもんなんてほとんど嫌がらせ（後書き）

一言つぶやき

アリス「私自身をヌメヌメにしたらソラはよってくれるのか？いや、止めておこじ」

ビビ「ヌメヌメなのはちゃんハアハア…！／／／／／」

**第三訓：転入生って学園ではよくあることだよね？BYネプテューヌ（前書き）**

龍の骨さんと郡司侑輝さんから転入生です。

### 第三訓：転入生って学園ではよくあることだよな？BYネプテューヌ

銀八「突然だが転入生が入る」  
全員「ストレートだなおい！」

開始早々銀八が行ったため全員揃って突っ込む。

ネプテューヌ「にしても転入生なんていまどき珍しいね」  
ルシアス「ここは学園よ？それぐらいいるでしょ」

銀八「そう言うもんだよ。おい、入ってこい」

銀八先生が言っていると転入生の人たちが入ってくる。

銀八「え〜、一人ずつ紹介しよう。まずは……」  
セイタ「あ、はい、僕は木村セイタと言います。よろしくお願いします！(ドキドキ)」

零斗「俺様は北郷零斗、特技はハジケだぜ！」  
アリス「アリス・チェンバースです」

友樹「僕は五代友樹。よろしく」

彩香「津上彩香よ」

慎吾「俺は門谷慎吾だ」

銀八「みんな仲良くするように」

ここで統夜が驚いて言う。

統夜「零斗じゃないか！」

零斗「お！統夜！久しぶりだな！達哉に遊輔、咲夜、メアリもいる  
じゃねえか！」

達哉「ああ、お前に会えてうれしいぜ！」

どうやら統夜と零斗は知りあっているようだ。

ネプテューヌ「統夜と知り合いなの？」

零斗「ハジケ仲間だ！」

ネプギア「は、ハジケ？」

ネプギアは全然ついていけないようだ。

セイタ「……………」

レーティア「どうしたのよ黙っちゃって……」

ジャンヌ「いろいろ教えてあげるよ……？」

セイタ「い、いえ、結構です」

セイタは顔をそらす。

ユウカ「あなた女性が苦手なわけ？」

セイタ「い……！？イヤそんなことは……」

レーティア「え？そう？」

レーティアが無理やりセイタの顔を向けさせる。

セイタは見た瞬間顔を赤くして気絶した。

レオン「おい、気絶したぞ」

ナリア「あ、ほんとだ」

友樹「さて、どうしようかな」

ラム「ねえねえ！趣味はなんなの？」



彩香「読書ね。作曲は得意な方よ」

岩沢「ならガルデモ入るか？」

プリア「ここで勧誘；」

慎吾「大体分かったな」

プリニー「分かってるんスか？」

新しく入った人もこんな感じだ。

銀八「挨拶すんだか？授業始めるぞ」

で…

銀八「『酔狂』を使って短文を作りなさい」

零斗「酒の飲み過ぎで酔狂ってしまったぜ！」

銀八「それはお前未成年だから」

新八「関係ないじゃん！！」

やっぱりハジケまくる零斗。

ガレーナ「なら飲むか？ホレ」

零斗「待て待て待て！俺酒はアババババババババババババババババババ

！！」

アリスチエ「零斗おおおおおおお！！！！」

零斗はガレーナによって無理やり飲まされた。

新八「つーか酒持つてくるなよ！」

新八の意見も最もだ。

ネプテューヌ「今日も楽しくなりそうだね」

ネプギア「そうだね」

超次元学園は今日も平和だ。

ブロンド「まああてええええええええええい！！今日という今日は許さんぞう！！」

ビビ「いやよ。絶対になのはちゃんのハートをつかむまで諦めないからね」

友樹「おい何で僕ら巻き込まれているわけ？」

彩香「知らないわよ！」

慎吾「絶望したああああ！！追われる羽目になっている俺達に絶望した！！」

追われる羽目に会っている3人を除いて。

第三訓：転入生って学園ではよくあることだよな？BYネプテューヌ（後書き）

郡司侑輝さんのオリ転入生を紹介します。

一人目

五代友樹 男

生年月日は1993年8月15日生まれ

一人称は僕

顔と喋り方と声はSEEDのキラ・ヤマト（保志総一郎ほし そういちろうボイス）

甘いもの全般が好き

タコとイカとイクラに魚卵（鮎は別）に山菜が苦手

蛇を見ると絶叫&amp;萎縮する

成績は優秀な方だが、カナヅチ。特技はハッキング。読書と昼寝とガンプラが趣味。一応手合わせ錬金術が出来るので修復担当だったりする。ツッコミ7割ボケ3割。怒らせると怖い。皆の笑顔と平和が一番がモットー

仮面ライダークウガに変身出来るがアギト・ギルス・アナザーアギト以外の平成ライダーにも変身出来る。

津上彩香とは恋仲

二人目

津上彩香 女

生年月日は1994年1月21日生まれ

一人称は私

顔と声はSEEDのラクス・クライン（田中理恵たなか りえボイス）

口調は普通の女の子と同じ

成績は友樹の次に優秀で歌が凄く上手く綺麗でちょい天然

好き嫌いは特にないし料理は出来る方

趣味は読書で特技が作曲

仮面ライダーアギトに変身出来る

五代友樹と恋仲

三人目

門谷慎吾 男

生年月日は1993年8月12日生まれ

一人称は俺

「大体分かった」が口癖だが、本当に分かっているのかどうか不明  
顔と声と口調はティエリア・アーデ（かみや ひろし 神谷浩史ボイス）

絶望する時に「絶望したっ！」と口にする

仮面ライダーディケイドに変身する

写真をたまに撮るが、ほぼ歪んで写る。それ以外は何しても上手い

三人はバイクを所持。友樹の愛機はビートチェイサー2000、彩香はトルネイダー、慎吾はマシンドィケイダーを所持しています。そして以上の三人はたまぁに声優ネタをします

#### 第四訓・男は変態という名の紳士（前書き）

〜一言つぶやき〜

真王「学園と言えはこんな一面も…」

#### 第四訓：男は変態という名の紳士

今日は女子の身体検査の日。

ネプテューヌ「む〜」

ネプギア「え…と…ど、どうしたの？」

ネプテューヌ「ネプギア、いつもより大きくなってない？」

半目でネプギアの一部を見るネプテューヌ。

ネプギア「そ、そんなことないと思うけど…」

ネプギアは否定するが、ネプテューヌは目ざとい。

ネプテューヌ「ハア…今日が身体検査の日だとしても…、私達は成長できないもんね〜」

ネプギア「お姉ちゃん。それは原作の話だよ」

ネプギアはため息吐くネプテューヌに突っ込みを入れる。

ネプテューヌ「でもでも〜、フェイトなんて0.5センチも大きくなっただよ」

フェイト「なんてこと言うのネプテューヌ!!」

フェイトのバストを語るネプテューヌに突っ込むフェイト。

なんで知ってるかは本人は『はやてから』と答えた。

はやて「フェイトちゃんもやけど…レーティアさんも負けてへんな」  
レーティア「そうかしら？」

はやてが羨ましそうに見ているとレーティアがバストを持ちあげる。

はやて「くあ！ムカつくな！こうしちゃるー！」  
レーティア「ああん！」

挑発されたはやてはレーティアの胸を揉む。

タバネ「はいはい、みんな順番に並んでね」  
ドクター「一列に並んでくれたまえ」

保険医のドクターと助手のタバネが言う。

一方身体検査の教室の外側

近藤「準備はいいかお前ら」  
ギルシア「何で俺様までこんなところに？」  
ヤルオ「そんなこと言って幼女の体が見たいんだろWWWWWW？」  
ザック「とうとう来たか…」  
ムツリ「・・・シャッターチャンス…」  
蒼馬「フフフフ・・・」  
プリニー「異論ないツス」  
樹「準備はいいか野郎ども…」  
明久「そのセリフ聞いたよ」  
ムツツリーニ「・・・」

怪しげな男組。  
察して分かるように覗きだ。

近藤「お妙さん。僕はあなたのご拝見させていただきます！」  
明久「僕って言っちゃったよ」

近藤の言動に突っ込む明久。

ギルシア「俺様は全裸に靴下が似合うぜ」  
ムツリ・ムツリニ「・・・ブツ!？」  
明久「想像して鼻血出したああ!!!!」

全裸に屈した姿の女の子を想像して鼻血を吹きだすムツリ。

ネプギア「いやああああああ!!!!」

突然ネプギアの声が聞こえた。  
変態共はバツと壁に耳当てする。

ネプテューヌ「ネプギア〜!お姉ちゃんの当てつけみたいにして〜  
!私だって変身すれば〜!!!!」  
ネプギア「言いがかりだよお姉ちゃん!ってひゃん!揉まないでエ  
エ!!!」

はやて「フェイトちゃん?やつぱらどんどん大きくなってないか?  
フェイト「はやて!揉みながら言うのは駄目!!!!」  
なのは「はやてちゃん。スキンシップ通りこしてるよ。」

スバル「ティア」  
ティアナ「ひつつくな!」

ビビ「なのはちゃん、一緒に揉み揉みしよ〜」  
ラム「む〜、私達だっていつか...」



ロム「・・・(黙って胸を見る)」「  
 ジャンヌ「お姉ちゃんまた一段と成長してる...」  
 レーティア「そう？あっちの方もまだまだ凄いわよ」  
 ガレーナ「最近肩こりが激しいな...」  
 アーカード「うむ・・・」  
 タバネ「ううん、みんななかなかの体系だね。私としてはチーチ  
 ちゃんの方が...」  
 ドクター「それは本人の前では言わない方がいいかと・・・」」

樹「いい声いただきました!!」

変態組「あざ〜〜ツス!!!」

中で何が起こっているのか分からなので声だけで想像する。

???'何をうれしがっているのだ?」

変態男子共「ギクツ(ス)!!!」

後ろの女性の声が聞こえたので振り返ると鬼教官チフユがいた。

チフユ「だめだろう?こんなところで覗きをしては...な?」

いい顔をしているが全然目が笑っていない。

変態男子共「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
 アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
 アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
 !」

覗きをしようとしていた奴らは悲鳴をあげた。

ネプギア「あれ？今のなんでしょう？」

ネプギアは疑問を感じるが、ネプテューヌが空耳じゃないのかたずけられた。

次の日、男子の身体検査

プリニー「酷い目にあつたツス…」

銀時「当たり前だ。覗きなんてするから」

先日にやられた人たちは少しボロ着いている。

統夜「そう言う銀時も覗きやろうとしてたろ」

銀時「ちげーよ。ホラあれだ。窓の中の桃源郷を眺めようとして…」  
達哉「それが覗きだよ！！」

銀時は言い訳するが統夜に突っ込まれる。

ソラ「ともかく、覗きをすればそれ相当の罰を受けるもんだろ」

プリニー「そうは言っても、ソラさん結構イケメンスツスからね。  
アリスさん達に覗かれたりしないんすか？」

ソラ「ないな。さすがにそこまでしないだろ」

ソラは否定している。

銀時「いや、そう言うのに限って実は女共も覗きをやったりすん

だよ」

新八「そんなわけないでしょ？ビビちゃんじゃあるまいし」  
ソラ「百合馬鹿は範囲外だと思うな」

そんな話をするときに限って彼らを覗く不審な人物がいる。

外

やはりと言うべきかソララバーズと銀時ラバーズとその他男好き変態女子どもがいる。

リリス「本当にいいんですか？見つかったらただじゃおきませんよ？」

アリス「その時はビビが犯人にする」

ライダー「さり気無く彼女を犯人に仕立て上げましたね……」

アリア「にゃー」

なのは「い、いいのかなぁ……」

フェイト「止めようよはやて」

はやて「この瞬間ぐらいええやる。なのはちゃんたちだって銀ちゃんを着替え姿みたいくせに……」

レーティア「ギルシア／＼／＼／＼」

相川「なんでこんなことに……」

メアリ「とかいいながら実は統夜の着替え姿みたいでしょ（私も……）」

エリア「明久さん……」

すでに待機状態の彼女ら。

アーカード「銀次の着替え姿…か」

挿してアーカードは銀次の着替え姿を想像している。  
さすが自称妻で銀次ストーカー。

アーカード「私は自称でもストーカーでもない！」  
相川「誰に言ってるのよ…」

地の文に突っ込むアーカードに相川が突っ込むと、

ユーノ「咲夜さん!!?」

ユーノの声が聞こえた。

咲夜「ユー君 一緒にやろうよ」

銀時「おイイイイ!! 着替え中に堂々と来るやつなんて聞いたことねえぞ!!」

統夜「ユーノ! 責任とって逝ってこい」

ユーノ「字が違ってる!! うわあああああ!!」

咲夜「待ってよユーくん」

どうやら咲夜が大胆に潜入してユーノを追いかけていたらしい。

アリス「なるほどな。大胆に潜入もありか…」

リリス「まず駄目ですよ!」

????「そっだぞ駄目だぞ」

アリスがひらめいた的な顔をし、リリスが突っ込むと後ろに誰かが

いた。

それは教師の神（呼称とされている）だ。

神「覗きとはいい趣味してるな」

レヴェツカ「年頃の女の子が覗きは駄目やで」

ニヤニヤ笑いながら言う神と抱きつくレヴェツカ。

レーティア「うわあ…どうし…あ、アーカードがいない」

レヴェツカ「銀次さんを連れ去ったのを見たで」

はやて「早速かいな！！」

いつの間にかいないアーカードは銀次を連れ去っていったらしい。

神「兎に角、覗きは駄目だろ」

真王「夫婦そろって覗きあつてたあんたらが言うセリフか？」

レヴェツカ「あ、理事長」

理事長に真王がやってきた。

真王「しかし、覗きをやるのは良くない。なので、『OOT』《女達をお仕置きする特殊部隊》のみなさ〜ん。出番ですよ〜」

真王が呼ぶと頭に罪と書かれた白いかぶり物にふんどしだけの大男型モンスター、罪男族が現れた。

しかもそれぞれ鞭とか棍棒とかろうそくとか猫じゃらしとかいろいろ持つてる。

変態女子どもは顔を青くした。中には期待している変態メンもいるが。

真王「OSHIOKIDA!!」



**第四訓：男は変態という名の紳士（後書き）**

「一言つばやき」

邪王「やっぱり好きだぜこんな感じの」

「予告」

アリス「ふふ、私とソラの愛の劇場だ」

真王「お前だけじゃないと思うぞ」

アリス「・・・メインだろうな」

真王「さあな」

第五訓：夜の学校はロマンチストの時間なんだぜ？知ってたかい？BY邪王（前

真王「ソラとアリスのムフフなストーリー」

邪王「よかったのか？」



## 第五訓：夜の学校はロマンチストの時間なんだぜ？知ってたかい？BY邪王

超次元学園・夜中

ソラ「こんな夜中に俺を誘うなんてどういう風の吹きまわしだ？」

アリス「フツ、私とて準備という者がある」

普通なら下校時間過ぎているのだが、なぜか2人がここにいる。

理由はこう、アリスが今日の夜に一緒に来てほしいといったから。

ソラ「冷やかしなことだったら俺は帰るぞ」

アリス「冷たいなソラ、前は優しく撫でてくれたのに…」

ソラ「小さいころにだろ」

なんだか幼馴染的なシチュエーション。

ソラ「そうしているのはお前だろ作者」

突っ込むな。

アリス「ま、それはともかく、誰にも水入らずの夜のデートとして楽しもうか」

ソラ「・・・リリースたちにどやされても知らんぞ」

アリス「その時はその時だ」

アリスはふっ、と笑う。

アリス「さ、行こうかソラ」

ソラ「・・・しゃーねえな」

ソラはしぶしぶ従う。

夜の世界で鈴虫と蟋蟀の鳴き声を聞き、夜に輝く星星を眺めたり、ちよつといたずら心でソラに攻めて見たりして、次に来たのは保健室だ。

ソラ「おい、なぜ保健室？」

アリス「きまつてるだろう？」

アリスは振り返って、

アリス「私はソラに愛されたいんだ」

告白をいった。

ソラはちよつと唾然とする。

アリス「幼きあの日に私とソラは同じ部屋で出会った。あの時は友としてだったが、今になつては仲間としてソラと一緒にいたな」  
ソラ「あれか。おれも覚えている」

昔を懐かしむ2人。

アリス「私はな、あの時からソラに恋をしている。まあ私だけじゃなくヤミやリス、アリアにセイバーもだが、私はもつと！」  
ソラ「うわ！」

アリスはソラを無理やりベッドに押し倒した。  
アリスの豊満な胸がつぶれるほどソラに抱きつく。

アリス「ん」

ソラ「ムゲ！」

それだけに飽き足らずキスをした。

ソラはいきなりすることに驚くが、仕方なく受け入れる。

アリス「私はもっとソラを愛し合いたいんだ」

見下ろすアリスの目はだれにも渡さないというような目だった。

ソラ「・・・その強情なところはわかったが？いいのか？こんなおれで」

アリス「いいさ、そんなソラだからこそ私は好きなんだ」

ソラ「言ってる」

モニユ？

ソラはアリスの豊満な胸をつかむ。

なかなかの弾力と柔らかさだ。

揉めばもむほど癖になりそうだ。

アリス「どうだソラ、私の胸の感想は」

ソラ「さあな、だがこれのおかげでよく男どもから告られたことがあるだろ？」

アリス「当然蹴ったがな。私はソラ一筋だ」

アリスはもともとなのは達のような美少女ベスト10の中に入る位の美人だ。

当然告白もされる。

だがすべて断つたらしい。

アリス「それに、私からすればソラが一番の男だ」  
ソラ「そうかい」

アリスは言うがソラはその程度で返す。

ソラは鈍感な性格なので乙女心などわかることはない。

????「…アリス…ずるい…」

ふと入口から聞き覚えのある声が聞こえた。

それはソララバーズの一人アリアだ。

アリス「…なぜここに？」

アリア「ソラとアリスが寮から出て行くのが見えた」

アリスは眉をひそめて聞くとアリアは答える。

アリスはちつと舌打ちした。

アリア「にゃ〜、そんなことより、二人だけで楽しむのは許せない。  
私も混ざる…」

アリス「む？ソラは渡さんぞ」

ソラ「なんで俺と遊ぶのが前提なんだよ…」

アリアとアリスがにらみ合う中ソラは溜息を吐く。

アリス「…しかたない、だがこれだけは言っておく」

アリア「『ソラはいつか私のものになる』でしょ？私も負けない…  
！」

アリス「いいだろう。というわけでソラ」

アリス・アリア「私を抱いて…（くれ）」

ソラ「おれの主張は無視か？」

ソラは頭を抱えた。

翌朝

アリス「ソラ、ボーリングで勝負するぞ」

アリア「じゃあ、私が一番をとる……」

セイバー「ぼーりんぐというのは分かりませんが勝負なら受けて立ちます」

リリス「負けませんよ〜」

ソラ「やれやれ、うるさいやつらだ」

なんだかんだいってソラはまんざらではない。

え？夜の出来事？危ない内容なので消されます。

強いて言うならキスしあったり胸使ったり、だからと言って処女喪失なことまではやってません。

余談だが保健室にいるドクターが「何か汗臭いにおいがする」と言っ  
つてベットを洗濯したようだ。

第五訓：夜の学校はロマンチストの時間なんだぜ？知ってたかい？BY邪王（後

真王「表現力が難しい！」

邪王「ある程度ぎりぎりな気がするが……」

第五・五訓：不良がすべて悪いとは限らない (前書き)

真王「カイトとミリアの登場だ」

## 第五・五訓：不良がすべて悪いとは限らない

放課後

キーンコーンカーンコーン！

銀八「おーし、今日の授業はここまでだ。ちゃんと宿題とジャンプ持ってくるように」

夕暮れにチャイムが入ってきたのでそういう銀八。

フーかジャンプ関係ありません。

門前

ネプテューヌ「そういえばあそこのクレープ屋さんで新商品発売したみたいだよ」

ネプギア「へー、寄ってみようかな」

とネプ姉妹がわくわくして歩いていると、

ナンパ男A「ようようかわいいごちゃん、俺らと遊ばないか？」

ナンパ男B「ホラホラ、アメちゃんあげるからさ」

ラム「だからこっち来ないでしょ！」

ロム「…うっぐ…怖いよ…」

ロムとラムがナンパ男たちに囲まれている。



ネプギア「大変です！助けないと！」

とネプギアは2人を助けようとする、

????「じゃまだ」

ナンパ男「なんだぎゃあああああああああああああああ  
！！！！！」

黒髪で黒いシャツと小さなマントのように前を全てあけている緑色の上着・藍色のジーパンを着た少年、もう1人は雪のような白色の短髪で蛍光色のワンピース（スカートは短め）と下に黒いハーフパンツを着た少女が木刀と木槍でナンパどもをなぎ倒した。  
ネプ姉妹はちよつとばかり唾然とするがすぐに正気に戻る。

ネプギア「ロムちゃん、ラムちゃん、大丈夫ですか!？」

ラム「フン、このくらい私たちだったら余裕で倒せたわよ！」

ロム「大丈夫…だと思っ…」

ラムはそっぽ向いてロムは小声で言う。

ネプテューヌ「え〜つと、2人と助けてありがとうね。なまえは？」

カイト「カイト・ネイラードだ」

ミリア「同じくミリア・ネイラード」

ラム「ネイラード？不良を自称して悪党潰しや人助けしているあの？」

ネプテューヌが名前を聞くと2人は答え、ラムが言う。

それを聞いたネプテューヌとネプギアは目を合わせたあと2人に言う。

ネプテューヌ「ねえ、学園に入学しない？」  
カイト・ミリア「・・・は？」

ネプテューヌの言葉にあっけにとられる2人。

ラム「いいねそれ！わたし大歓迎だよ！」

ロム「私も・・・」

ラムとロムはハイタッチ。

しかしカイトとミリアはあわてながら言う。

カイト「い、いやいやいや、俺たちは不良だ」

ミリア「そうだよ、それにはいつても迷惑だし」

真王「学園に迷惑の文字はない」

すると分厚い本を持って現れる真王。

ネプテューヌ・ネプギア・ロム・ラム「理事長せん長！？」  
カイト・ミリア「理事長！！？」

真王「自分たちが不良だからと言いついて遠ざかるのか？それはだめだろう。自分の本質を恐れて前へ進めないのは時たまあること、だがわが学園はそんな事などすべて受け入れてくれるさ」

カイト・ミリア「・・・」

真王「どうするんだ？不良行為を続けるか？」

ネプテューヌ「それとも受け入れて友達になるか」

ネプテューヌの友達に反応する。

カイト「いいのか？おれらを」

真王「この子たち・・・彼らと友となるなら入学を許可しよう」

そう言う真王の視線の先には超次元学園の生徒達がいた。  
カイトとミリアは深く考え、結論を導いた。

カイト「いいぜ。入ってやるよその学園に」

ミリア「僕も賛成」

真王「決まりだ。そして」

全員「超次元学園へようこそ!!」

カイトとミリアが学園の生徒となった。

## 後日談

銀八「お前ら。また転校生がやって来たぞ」

2人が正式に生徒として迎えてから一週間後、また新たに転校生が、

楓「今日からこの学園に生徒になります音梨楓です」

椀「音梨椀よ」

更ににぎやかになりそうだ。

第五・五訓：不良がすべて悪いとは限らない (後書き)

真王「キャラが4人も増えた」

**第六訓：改造と変身は全然違う（前書き）**

真王「少し異変が始まります」



銀八「おまえら、知らん間にキャトルミューティレーションでもされたのか？」

ネプ姉妹「キャトルミューティレーション？」

銀八は説明する。

キャトルミューティレーションとは宇宙人が牛をさらって改造もしくは解剖するために連れ去る現象だ。

2人は記憶を探る。

ネプテューヌ「あ！」

ネプギア「もしかして…！」

## 回想

ネプテューヌとネプギアは暗い空間にいた。

ここはどこだと言わんばかりにあたりを見回していると

????「ガッハツハツハ！目が覚めたか？」

紫にスーパーマンのような不細工キモいおっさんがいた。

というか2人はこの顔に見覚えがある。

ネプテューヌ「ワリオ？」

ネプギア「ワリオさんじゃないですか」

ワリオ？「ちっがっう！俺様はワリオに見えてワリオではない！ワ





そしてそこから意識が途切れてしまう。

回想終了

すべてを思い出した2人はこめかみに青筋を立てている。

銀八「・・・じゃ、じゃあお前らはそいつの暇つぶしのために改造されたのか？（失笑）」

ネプテューヌ「おいこっち向けコラ」

笑いをこらえる銀八に静かに起こるネプテューヌ。

ネプギア「笑い事じゃないんですよ！！こんな事じゃ恥ずかしくって買い物に出かけられません！！」

この指をユニ達に見せられたら呆れられる上に笑われて恥を感じる。それだけは避けたいとネプギアはどうすれば良いのか考える中、

ユニ「銀八iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！」

ユニが銀八のところへやってきた。

ユニ「これどうにかしなさいよおお！！！！」

と言っていせたのはサイコガンと化した左腕だった。

ユニ「なんであたしの腕がサイコガンなのよ！！銃撃がりだからってこれはないでしょ！！」

サイコガンハンターみたいになったことに怒りをぶつけるユニ。

ネプギア「ユ、ユニちゃんも改造されて…！？」

ユニ「！ま、まさかネプギア…あんた」

まさかの仲間に2人は抱き合った。

それだけでは終わらない。

ラム「先生！！私の頭がカボチャにい！！」

ロム「私…虫になってる…」

ラムの頭がカボチャに、ロムは虫になっていた。

ラムのほうは頭がふらふらしている。

ネプギア「ロムちゃんラムちゃんまで！」

ネプテューヌ「ということはもしかして…」

ネプテューヌは予測したが、それは案の定になった。

## 教室

なのは（ネコ）「クラス全員が巻き込まれているなんて…」

レオン（獅子）「ああ、この事件は裏があるな」

ジャンヌ(蝙蝠)「一つはあのワリオマンよ」

マリオ(地蔵)「あいつか」

ルイーダ(タヌキ)「なぜに兄さん地蔵マリオ?」

銀次(赤屍)「なぜに赤屍さん?」

アーカード(とあるの歩く18禁)「むう、胸が少しきついな」

レーティア(サキュバス)「えっと、似合うかなギルシア」

ギルシア(犬)「似合うぜ!」

近藤(完全にゴリラ)「俺大きく変わっちゃったんですけどオオオオオオ!」

沖田(カラス)「大丈夫ですぞ近藤さん。土方さんは犬の餌と化してますから」

土方(マヨネーズ)「なにがだ、マヨネーズを舐めんな」

タバネ(うさぎ)「まあとりあえずそのワリオマンに会えばいいだけじゃない?」

チフユ(ガヴェイン的ななんか)「マリオ、そいつのいる場所が分かるか?」

マリオ「ダイヤモンドシティだ。あいつの実家がある」

椀(犬天狗)「なんでもいいけど早くしようね」

楓(ミリアキャット)「とかいいながら抱きつくのは止めてもらえませんか?」

カイト(狼)「なんでこんなことに?」

ミリア(カンガルー)「僕がしるわけないよ」

銀時(ある場所に竹のアレ)「んなことはどうでもいいからさっさとそのワリオマンをぶっ殺そうぜ?」

クツパ(角がキノコ)「あいつのアナログスティックが変わってか  
らすごい豹変してるのだ」

真王(特に変わってない)「いききたいならとめはしません。とりあ  
えず往復券は渡しとく」

ソラ(黒豹)「悪いな」

冥王(タイガー)「よし、みんな出発なの!」

変化した一同「おお〜!!」

こうしてフリオマンを懲らしめるべくダイヤモンドシティへ向かった。

## 第六訓・改造と変身は全然違う（後書き）

「一言つぶやき」

真王「さて、どう動くべきか……。ミニゲームにするか？」

第七訓：実は本人と分裂するパターンもある（前書き）

～一言つぶやき～

ワリオ「鳴神ソラの俺は下品を持ち合わせていないぞ！」

## 第七訓：実は本人と分裂するパターンもある

ダイヤモンドシティ

銀時「ココがダイヤモンドシティか」

ダイヤモンドシティに到着した超次元学園生徒一同。

銀時「よし、あのへんなブサイク仮面野郎のアレを原型なくなるまでイタぶってやるうぜ」

ルイージ「うわ；銀さん完全にブチ切れ寸前だよ…」

ネプギア「銀さんの…あ、アレが竹に代わってましたからね。カコンカコン言うあれに」

カイト「奴が切れる理由がそれか…」

すでに切れ顔の銀時に引く一同。

銀時「おいマリオ、あいつの実家何処だ？今すぐあいつのアナルグスティックをぶっ潰したいんだけど…」

マリオ「落ち着け；俺が案内するから…」

ひとまず銀時を落ち着かせてワリオの実家までいく。

で、ワリオの実家前

ドタバタ！

さつきからドタバタやかましい。

ルイージ「何やってるんだろう……」

ルイージが首をかしげていると、2人の男が飛び出した。

一人はマリオに似た黄色いオーバーオールに紫のつなぎの不細工男。  
もう一人は、

全員「ワリオマン!？」

???「おお!お前らちょうど良かった!そいつを捕まえてくれ!」

銀時「ホワタア!」

銀時は男が言う前に木刀を振るがすぐに避けられる。

ワリオマン「ガッハッハッハ!アバヨ!」

ワリオマンはどっかへ飛んでいった。

マリオ「さてワリオ。どういふことか説明してくれるか?」

ワリオ「わ、分かったから後ろの奴らを押さえてくれないか?」

ワリオの言う後ろの奴らとは殺気を放っている銀時達。

マリオ「スマン、無理だ」

ワリオ「アーーーーーッ!!!」



で・・・

マリオ「実験に付き合わされた？」

ワリオ「ああ、これが事件の真実さ」

ワリオ曰く、このダイヤモンドシティの博士の実験を受けてワリオとワリオマンが別れてしまったらしい。

しかもワリオマンはゲームや漫画でお馴染みの不細工なところが濃いらしい。

ネプテューヌ「その博士さんのわるいけど、まずはワリオマンだよ！何処行っただかな？」

ワリオ「安心しろ。こう言う時のために発信器取りつけて正解だったぜ」

ワリオは受信機を出す。

ネプギア「よかったです。これで居場所が分かりますね」

ワリオ「ああ、この位置だとすると……俺の会社・メイドインワリオだ！」

メイドインワリオ・入り口前

ワリオの髭がWと模したビル100階建くらいの会社がある。

ワリオ「あいつがこの最上階にいやがるぜ」

銀時「良し行くぜ。あいつの？玉漬してやるぞ」  
フェイト「銀時、まだ引きずってるの？」

銀時はそれしか考えられないようだ。

メイドインワリオ・1F

ワリオ「階段が使えねえな。使えるのはこれ一つか」

ワリオがエレベータを見て言う。

階段は封鎖されている。

ワリオマン『ガッツハツハツハ！よく来たなお前達！』

するとモニターが現れてワリオマンが映る。

入浴状態で。

全員「キモイわああアアアアア！！！！」

全員揃ってモニターを壊す。

ワリオマン『おい壊すのはないだろうが！』

別のモニターが現れて抗議するワリオマン。

ちなみに入浴シーンは写してない状態で。

ワリオマン『まあいい。実はここを俺様があれこれ魔法をかけて一回ごとにミニゲーム出される。一回クリアで一階上がれるぞ』

ワリオ「何！？俺様の会社を改造したな！？」  
ワリオマン『面白そうだからな。待ってるぜ』

モニターが切れた。

ワリオ「こんなのつとりの仕方するとは……」

銀時「舐めやがって……そのキン？マを潰してから料理してやる」  
アイエフ「いつまでそのネタ引っ張ってるんだよ」

根に持つようだ。

ミア「ところで一体どんなミニゲームなのかな？」

ワリオ「ああ、それはだな」

全員「それは？」

ワリオ「それは………メイドインワリオをやってる人に分かる！」

全員「なんじゃそりゃ！！？」

カメラ目線でいうワリオに突っ込みを入れるのであった。

第七訓・実は本人と分裂するパターンもある（後書き）

真王「さて、どうしようか」

第八訓：ゲームがヘンテコだって！？これがメイドインワリオなんだよ！BYE

ワリオマンがメイドインワリオを支配して、銀時ら一行は100F  
へ向かおうとする。

しかしワリオマンの作りだした試練に彼らは苦戦をういられる。

2F

ネプテューヌ「パンキャッチ！」

ベール「お見事ですわ！」

トースターから出たパンを片手でキャッチしたり、

4F

桂「ぎゃあああああああ！！！！」

はやて「桂さんがボールにつぶされたアアアアアあ！！！！！！！！」

巨大ボールから逃げたり、

7F

ドーーーーン！！

プリニー「つぶされるッス！！！！」

巨大なおばさんの足から逃げたり、

8F

ビッ!

なのは「にゃあっ!!」

銀時「何やってんだよ!!」

ワリオ「俺を殴るなよ!」

ワリオ(偽物)が目薬を目からビームで壊したり、

9 F

神楽「ホワタア!」

迫りくる壁から逃げたり、

10 F

ネプテューヌ「おて!」

犬「ワン!」

犬とおてしたり、

その後電車をタイミングよく止めたりボーリングしたり紙飛行機を操ったりワリオがじゃんけん(あと出して)マリオに勝ったりマリオより大きくなったりパーキングしたりカエルが跳んだり亀が食べたりあみだくじでお湯を注いだり宇宙言ったりなんかリアルだったりサンタマリアが出たり貞子が出たりおっぱいが出たりなんか怖いものが出たりくまから逃げてたりへそくり探したりなんでもいろいろあると、そして100 F。

ハラヘツタ「ギャアアアアアアアアアア!!!」

宇宙怪物ハラヘツタをたおしててようやく付いた。  
すでにボロボロだが。

ネプテューヌ「や、やっと着いた……」

統夜「あいつ本当におちよくってるな。終わったら半殺しにしてやるるか」

メアリ「賛成、帰ってシャワーでも浴びたい」

ネプギア「社長室です。入りましょう」

銀時達は社長室に入る。

そこに社長席で態度でかく座っているワリオマン。

ワリオマン「よく来たなお前達」

銀時「腹立つ座り方してんなおい」

態度のでかいワリオマンに銀時は言う。

ネプテューヌ「さあ私達を元に戻してもらおうよ!……と言っても実は約束が嘘でこのまま私達を潰しちゃオーってパターンがあったりして」

カイト「そんなことあるのか?」

ありえないと思うカイトだが、

ワリオマン「良く俺様がやるうとしてたことが分かったな!」  
統夜「……当たり前だったの?」

ワリオマンが肯定した。

ワリオマン「だがこれで終わりなのだ。ぼちつとな」

お約束の如く銀時達は上から生えたバキュームで吸い込まれてほうりだされる。

そしてメイドインワリオがガチャガチャと音を立てて変形ロボに変わった。

機動戦士ガンダムのザグをイメージ。

ネプテューヌ・ネプギア・ラム「ロボットだああ！！！」

アイエフ「って作品パクってるじゃないの！！これじゃ機動戦士が付いちゃうじゃない！」

ワリオマン「何とでもいえ！メイドインワリオ号！力を見せてやる！」

ワリオマンはロボを動かす。

すると神楽とロムが別の方を向いている。

ロム「ラムちゃん、何か落ちてくる」

神楽「銀ちゃん豚が墜ちてくるね」

銀時はあ？と言って上を見上げると、確かに豚型の宇宙船が墜ちてきた。

ワリオ「あ、あれはオデューロンの宇宙船……」

そうワリオがいつてるときに、

ドゴッシー！





**第九訓：優秀だろうが所詮層の集まり（前書き）**

真王「なめ猫さんからリクっぽいので書いてみた」

## 第九訓：優秀だろうが所詮層の集まり

ネプテューヌ「でさあ、銀さんわたしが貸した怖い話を読んでい何  
度も「俺は絶対怖くなってないからな！」「てさ」  
ネプギア「ある意味銀時さんらしいですね」

ネプテューヌとネプギアが一緒に登校しているところ。

女子生徒「いやーやめてください！」

男子生徒「うっせえよ女<sup>ママ</sup>まともに用意できない奴が偉そうにすんな」

超次元学園の生徒ではない生徒がいる。

傍から見るに女子生徒が男子生徒に囲まれていていじめられている。  
それを彼女らは見捨てるようなものではない。

ネプテューヌ「ちょっと何やってるの！いじめはだめだよ！」

ネプテューヌが食って掛かる。

ネプギアは姉を見守っている。

男子生徒「ンだお前？見ねえ奴だが下級学園の奴らか？」

ネプテューヌ「（ピク）下級？見た目的に下級そうなあんたらに言  
われたくないよ」

男子生徒「テメツ！俺たちを下で見やがったな！俺たちはかのエリ  
ート学園生徒だ！しかもA級クラスなのな！」

ネプテューヌのセリフに切れた男子生徒がエリート学園の生徒だと  
言った。

ネプギア「エリート学園！？確か全政権を握らせているエリートのみしか集まらないあの学園の！？」

エリート学園男子生徒「お？嬢ちゃん物分かりがいいじゃねえか。そう、俺たちは泣く子も黙るエリート学園のものだ。さあ俺たちにひざまずきな！」

エリート学園生徒は偉そうな態度で言う。  
対してネプテューヌは、

ネプテューヌ「ええ〜！そんなにすごい学校なんだ〜（超棒読み）  
棒読みで返事した。

エリート学園男子生徒「テメえ…本気で痛い目に会わなきゃ気が済まないらしいな…」

5人の男子生徒がにらむ。  
だが、

ネプテューヌ「女の子をいじめている奴らが、エリートを名乗るもんじゃないよ…！」

エリート学園男子生徒達「ぎゃあああああああああああああ  
！！！！！」

ネプテューヌは男子生徒達を半殺しにした。  
一心生きている…くらいにな。

ネプテューヌ「大丈夫？」

ネプテューヌは女子生徒に手を差し伸べる。

だが女子生徒は絶望した顔で言った。

女子生徒「なんてことを、あなたたちしんでしまっわー!!」

と言つてどっかさつていった。

ネプテューヌ「なによ。あの態度……」

ネプテューヌはふくれっ面で女子生徒の去つて行つたほうを見る。  
ネプギアはあの顔を見て不安を募らせた。

### 超次元学園教室

ネプギア「……………」

あのあとからあの女子生徒とエリート学園の事が頭から離れられないネプギア。

ネプテューヌは相変わらず遊び呆けているが。

ユニ「なに惚けてるのよネプギア」

ネプギア「わっ！ユニちゃん？」

いきなり後ろからユニが抱きついてきて驚くネプギア。

……ネプギアとの百合属s「あるかそんなもん!!!!」あつそ。

ネプギア「ユニちゃん？何処に向かつて叫んでるの？」

ユニ「なんか電波が来たのよ。それよりネプギア。一体どうしたの？」

ネプギア「うん、ナンパされてた生徒を助けた事なんだけど…」

ユニ「なにそれ、普通じゃん」

別に悩むことじゃないだろと言いたそうな目でいうユニ。

ネプギア「そうじゃないの。そのナンパしてきたのがエリート学園  
つて人たちで…」

カイト・ミリア「ツツ!!?」

ネプギアのエリート学園という単語にカイトとミリアが反応する。

ユニ「ああ、何かいちやもんつけて我が物顔の奴らね」

ギルシア「俺も知ってるぜ。あいつら目つけた女には必ずちよっ  
かい出しやがるからな」

マリオ「一部では常識のない集団だろうな…」

超次元学園生徒達はエリート学園をよく思っていないらしい。

ユニ「んで、あなたのお姉ちゃんがそいつ等を半殺しにしたと？」

ネプギア「はい、ほぼ瞬殺でしたけど…」

フウ「さすがですね…」

ステラ「やっぱあなたの姉ね」

華琳「・・・」

感心するフウとステラと華琳。

3人もロムとラム、そして統夜たちの知り合いでここに転校して  
きたのだ。

統夜「？おい2人ともどうした？顔色が優れないぞ」  
カイト「・・・なんでもない」  
レオン「様に見えないぞ」

統夜が顔色が優れないカイトとミリアを見て言う。  
カイトは否定するがレオンがそれを否定。

ユウカ「そうね。何かを知っているならはなしなさい？」

ユウカがいう。

だがカイトはすぐに立ち上がって教室から去っていった。

銀時「あ、おい！」

ミリア「カイト君待って！すみません、後で！」

ミリアはカイトを追いかけた。

全員「・・・」

レオン「何かを知っているようだな」

ガレーナ「ああ、奴らと何らかの縁があるらしいな……」

黙って見届ける一同であった。

カイト「胸糞悪いもんを聞きちまった……」

ミリア「カイト君……」

屋上で苛立つカイトと心配そうに見守るミリア。

エリート学園は彼らにとって因縁のある物であり、存在してはなら

ない者。

カイト「悲劇はここで止めてやる！」

エリート学園理事長室

???「失礼します理事長。先ほど我が生徒達がある者どもに半殺しにされたとのことです」

何やら執事っぽい男が理事長に言う。

???「だれだ？この学園に命知らずに喧嘩売った奴は」

執事「2人組の紫髪の少女で超次元学園の物でございます」

理事長「超次元学園：ククク、成程な」

理事長は口の弓を吊り上げる

理事長「そこか。そこに奴もいるのか。好都合。なら俺様が一番の学園界の神にふさわしさを思い知らしめてやるうか」  
執事「かしこまりました。ダヌ・カースター理事長」

裏で新たな動きが始まりそうだ…。



第十訓・もう後には引けないBYカイト（前書き）

真王「なめ猫さんの書いた感想を出してしまいました・・・」

## 第十訓：もう後には引けないBYカイト

ネプテューヌがエリート学園をぼこってから数日後、

ジャンヌ「みんな！カイトとミリアがいないよ！」

全員「なにっ!？」

カイトとミリアが忽然と姿を消した。

ジャンヌ「寮で『出かけてくる』って置き手紙が置かれてあったの  
レオン」ではあいつらはエリートの奴らとつながりがあるのか？」  
ソニック「ヘイ、どういうこった？」

勇華「私がいうわ」

クラスメイトの勇華が現れた。

勇華「彼らの部屋にこれを見つけてね」

そう言っ出て出したのはレポートのようだ。

『』とあるエリート学園入学記録』

この日をもって、俺とミリアはついに学生となった。まさか、いきなりこんなエリート学園に入学するとは、俺もミリアも思わなかった。

ただ、少なくともデイセクターと覚醒した女神の子に生まれたからでなく、自分達の努力が実ったからだだと両親に言われて、すごく嬉しかった。

これから、俺達はどこまでいけるだろうか？俺は、楽しみで仕方が

ない。

『ネイラードレポート1』

入学してからまだ少ししか経ってないが、俺達はすでに学園に慣れていた。勉強や武術についても、遅れることなく順調に励んでいる。それと、学園の特徴についても少しずつ見えてきた気がする。あの学園は、特に恋愛が積極的なようだ。なんと学生だけにとどまらず、先生の恋愛についての話題もあったのだ。

父さんと母さんに、恋愛にもいろんな形があると教えられてきた俺達にとって、これは面白そうだ。

これからどんな恋愛を目にするのか、期待してみよう。

あ、こりやまたミリアから「負けずにいちゃいちゃしようね」って言われるかな？

『ネイラードレポート2』

ボクとカイト君が入学してから、学園は夏休みを控えていた。けど、この学園では毎年夏祭り・クリスマスパーティー・お正月イベントをやってるんだって。どんなイベントを開くのかなあ…

それと、今日も面白そうな恋愛を見つけた。今日見たのは、Aクラスの優等生の男の子が、たくさんの女の子達に好かれている恋愛。女の子達は積極的で、ちょっと競争してるような感じだったけど、優等生は穏やかにしてた。名前はケメーだったっけ。

そういえば、ああいう恋愛が描かれた小説などを読んだことがあるけど、決着つかずだけど仲良しな結末がほとんどだった気がする。実際に初めて見たけど、いつもあのままなのかもしれないね。

あの恋愛を見つめてみるのも、何だか楽しいな

『ネイラードレポート3』

いよいよ夏休みか…早かったな。

とはいえ、学園では夏祭りの準備もあるから、学園はにぎやかなままだろうな。授業が準備の時間になっただけで、いつも通り…だな。俺達も準備の手伝いをしていたが、今日はびっくりすることがあった。武術部で他所の学校と練習試合をしていた時、なんとその他所の学校の女子達までもが、あの優等生ケネーに恋愛の感情を持つてることがわかったんだ。どんだけすごいんだ…？

そんなわけで、ケネーの人徳がすごいってことを知った。すごすぎる人間って、本当にいるもんなんだなあ。

『ネイラードレポート4』

もうすぐ夏祭りが始まる。また、恋愛についても大事な時期なんだって、クラスの人達が言ってた。

今日、ボクもカイト君も期待を胸に準備をしてたら、また別の恋愛を目にしたの。今度は普通っぽい純粋な男の子と、女の子2人の三角関係みたいで、女の子についてはアクティブで明るい人と、大人しそうな人だったよ。どんな恋愛してるのか、ボクもカイト君もすごく気になった。

…でも、その期待は裏切られた。

ボク達がまず見たのは修羅場で、しかも女の子達はどちらも本気だった。どういうことかクラスに聞いてみた所、元々は大人げな女の子・クラが男の子・タンダと付き合っていて、それを明るく女の子・ヤンナが寝取っただけらしいの。

結果、タンダの気持ちはヤンナに寄りかけてしまっている…だから、

あんなことになってるんだね…  
いい恋愛ばかりを期待しすぎてたな、ボク。中にはドロドロな恋愛も存在している…そんなことを忘れてたよ。  
…とにかく、あのまま悪化しなければいいんだけど…

『ネイラードレポート5』

夏祭り当日。噂通り、とても賑やかで皆楽しそうだった。さらに、他所の学生もたくさんやって来ていて、仲良く交流していたりしていた。俺達も、すごく楽しくて笑顔が絶えなかった。  
…あの時までには…な。

それは花火を見ていた時のこと、突然悲鳴が上がってきた。俺達はすぐに原因を確かめに行く、人が死んでいた。死んでいたのは、クラ…あの大人しそうな子だ。それと、タンダも死んでいた…タンダの手には包丁が握られていて、二人の死体には刺し傷があった。どうやら、包丁によるもので間違いなさそうだった。

でも、一体何があったっていうんだ…？自殺？心中？

…わからないが…恋愛で人死に出るなんて、信じられなかった。いくら競争って言っても、ここまで酷くなるものなのか…？父さんと母さんから、それなりに恋愛の重さは教えられたけど、やっぱり…信じられねえよ…

もう、夏祭りを楽しむ気分にはなれなかった。

『ネイラードレポート6』

あの夏祭りから1か月後、俺達は試験に向けて勉強をいつもより多くしていた。だが、あの日の悲劇はまだ鮮明に頭に残っている。気がかりで、集中力を削がれることもあった。

学園からの発表によれば、二人そろって心中した可能性が高いとのことで、その原因は不明だった。だが、俺は気になっていた。あれだけ揉めていたし、死にたくなるような所も見られなかったはず。それなのに自殺するなんて、まだ信じられないんだ。

だから、俺達は休みの日にクラの実家に立ち寄って話を聞くことにした。はじめは学園の学生っていうだけで、なかなか話を聞いてくれなかったけど、ミアアの説得のおかげで話ができるようになった。クラについて話を聞いてみたんだが、自殺は嘘だと両親は言った。何でも、クラはタンダが寝取られてから、ヤンナの友人達に決められていたそうだった。それはあまりにも陰険で、クラをヤンナからタンダを奪おうとするビッチって汚名を着せて、自分達は正義面。しかもレイプまでされたとか。さらに、先生達までもクラの話を信じず、傍観をしていたとも言っていた。ところが後日、いじめられてポロポロになったクラをタンダが目撃し、タンダは罪悪感によって目を覚まし、浮気することをやめてクラに戻ったらしい。だがあの日、二人は死んだ。

ということは、まさかヤンナかその友人達が…？

…嘘だろ…？国の代表として有名なエリート学園が、裏では顔が別物だっというのか…？

…まさか…な？

### 『ネイラードレポート7』

ボク達は思った。もし、ボク達がもっと早く気付くか、クラちゃん達に介入していれば、殺されることはなかったのかな…？そう思うと、ボク達も罪悪感を抱かずにはいられない。きつと、見殺しにしてたことなのだから…

両親から話を聞いた後、ボク達はヤンナ達を少し監視してみることに

にした。カイト君はすぐにつぶしたがってたけど、今はまだ我慢するべきだってなだめてあげた。もっと深く知ってから決めるべきだって、お母さんにも言われてるし。

それで、こっそり彼女達の話盗み聞きしてみたけど、友人達がヤンナに「クラと彼氏のタンダを会わせてしまったこと」を謝罪していて、ヤンナは「悪いのはクラだ」って答えてた。そばには先生が1人いて、「タンダはクラの毒でおかされすぎて、もうどうしようもなくなっただ」って同調していた。

…これで事実は見えてしまった。あの日、自殺したんじゃない。心中したように見せかけて、ヤンナが二人を殺したんだ。

どうして殺す必要があったの？ どうしていじめる必要があったの？ ボク達はそれが理解できなかった…：…ううん、理解したくなかった。それに、どうして先生まで傍観を…？

…ちなみに、カイト君はその日、心が悲憤でいっぱいになって、ずっと震えながら歎いてた…

ボクよりもずっと、嫌な気持ちになってるんだね…カイト君…

『ネイラードレポート9』

監視を続けるようになってから、気がつけば10月下旬にある文化祭が近付いていた。でも、今のボク達はそんな気分じゃなかった。いつも通り調べ事をしていたら、突然Sクラスの男達がボクにナンパをしてきた。Sクラスは、学園中で最高学年。つまり、ボク達Bクラスよりずっと上の人間達だった。その中には学生評議会の者も何人かいて、ボク達の暗躍や授業や休み時間で失敗したこと、そしてカイト君と双子でありながら恋人として付き合っていることをネタに、様々なルール違反の容疑がかけられているって圧力をかけてきた。どうやら、ボク達が都合な人間とみなされたいらしい。ボク達はどうにかやり過ごそうと、言葉だけで抵抗したけど、ついに向こうからボクに痴漢をしてペースを崩そうとしてきた。ボクは資質で

それをカウンターを与えるように阻止し、カイト君と一緒に逃げた。今のままじゃ、勝てないかもしれないし、下手なことでもできはしなかった。

その後、ひとまず授業へ逃げるのができたけど、この後がボク達に決断を迫られた。そう、今日から性教育という科目が毎日入るようになって、ボクとカイト君は男女に分かれるために離れることになった。

そこで知ったのは1つ…

『性交による秩序』

すなわち、これから女子は先生を含む男に体を捧げ、服従するという秩序だった。突然、まわりのクラスの人間のほとんどがボクを囲み、ボクにも服従を追った。

もう、次にやることは決まっていた。

ボクは、ついに武術を振るって逃げ出した。途中、同じく嫌がって逃げてきたカイト君と無事合流できた。カイト君も、自分が上の立場にいることなんて関係なく、嫌気がさして逃げてきたんだって。

その後のまた途中、ボク達は最大の事実を目にしてしまった。

他のクラスや学生評議会、さらに先生達がみんなそろって性交、というより乱交をしていた。

そこにはケメーもいて、その人の素顔も見えた。ケメーは1、2組の純粋なカップルを裂いて割り込み、男は袋だたき、女は無理矢理抱いていた。しかも、ケメーの取り巻きも扇動して、うまく洗脳して自分の物にしていたの。別のクラスでも、差別を受けている学生のほぼ全員が逃げられずに食われてしまっていた。ほとんど、一夫多婦ばかりになっていた。

これで、もう学園の全貌が見えたようなものだった。



恋愛の形みんなが醜いこと、理想を裏切られたことにカイト君が絶叫し、ボク達は追手を半殺しにしながら学園を脱出した。

もう、あんなエリート学園になんか行きたくない。

絶望したボク達は、そう強く思った。

『ネイラードレポート10』

俺は甘すぎた…

入学前にあんな事実があることを知らなかったとはいえ、すぐに見抜けないなんて。

俺は、甘すぎたんだ…

あの後、俺達はもう学園に行くことはなかった。行った所で、学ぶことなんてもうない…逆に余計嫌な思いをするだけだ。

そもそも、エリートとは何なんだ？優等生ってどんな人のことなんだ？秩序って何だ？どうしてあんな学園が代表なんだ？何がどうなってるんだ？…いや、この疑問の答えなんて、嫌なものしかないだろう。俺はもうしばらくじっとしていたかったけど、ミアは「あの学園によって、まわりにも影響がないか気になる」って言葉を聞いて、またすぐに動かなきゃいけない気がした。

そこで、俺達は学園に関連する事や物全てを知るため、国のあちこちを飛び回った。他の学園にも行き、秘密情報もできるだけ全て集めた。

結果…やっぱりって思うしかなかった。

学園の毒牙は他の学校にも伸びていて、他所の女達までも食っていた。それだけじゃない…スポーツ協会や学園警察、さらには町長をはじめとする国の権力者全員がエリート学園の淫行を裏どころか公式にも認め、やがて親や子も洗脳されつつあった。

…俺達は国の形そのものも確信した。

奴らは淫行をもってエリートという貴族の勢力を拡大し、やがて全世界を性交の秩序で縛りつけるつもりなんだ。

これが…こんなのが、正義だっていうのか？こんなのが、理想なのか？秩序なのか？

理解できない…したくない。

これじゃ、弱い者いじめや理不尽な差別が広がるじゃないか…！

できるなら、言葉で解決したい…でも、奴らは聞きやしない…

俺じゃ…どうにもならないのか…

俺は、何もできないのか…

畜生…っ俺は…俺は…っ！

『ネイラードレポート11』

クリスマススイブ。

この日、1つの国が壊滅した。

かつてボク達が通っていたエリート学園も、何もかもが破壊された。

そう…全て壊された。

神も。

王も。

秩序も。

カイト君ただ1人に。

あの日…あの学園でクリスマスパーティーが開かれていた時、カイト君はたった1人で学園に向かった。

何をしようとしているのか、それはわかってた。流石にボクもそうせざるを得なかったけど、カイト君の心はもう限界のようで、憎悪をおさえきれず、暴走しないか心配だった。ボクもそうなんだろうけど、心が暴走しだした時、全てを容赦なく壊し、何もかも滅ぼしつくす、節理秩序無視の無敵なる鬼へと変貌する。

そうなったら、カイト君は理性をなくして人殺しをしてしまう…それだけは、絶対にさせたくない…だからボクは、カイト君を追いかけた。暴走する前に、カイト君を止めてあげなきゃ…！

追いついた時には、すでに破壊されつくした後だった。

カイト君に睨まれた者は皆、全身の骨をたたき折られ、打撃による激痛を与えられ…深いトラウマを植え付けられた。

全てを怒りでたたきつぶした後、

カイト君は…泣いていた。

殺したいのに、殺せない…私念だけで殺してはいけないから…

カイト君はもどかしくて…辛い気持ちでいっぱいだった。

暴走しなかったのはよかったけど、これじゃまた心ない人間達と同じことを繰り返すかもしれない…

そう考えると、カイト君の気持ちには納得できた。

やっぱり…悲しいよね…

心ある皆も、ボク達も…

これで、咎人になった。ミリアはともかく、俺は国を壊しつくしたことで、秩序への反逆者になったんだ。

今さら、正当化する気なんてない。ああいうのが正義だって言うのなら、俺は悪でいい…極悪だってかまわない。これからは、極悪なる不良として生きよう。その方が気が楽だし、戒めにもなる…

ミリアと話し合った末、俺達は両親の元へ戻り、全てを話して離別しようとした。極悪である我が子なんて、いても辛いからな。覚悟はもうできていた。

…ところが、予想は外れた。

父さんも母さんも、ただ批難するべきことを批難し、励ますべきことを励ますだけで、俺達と離別する気は全然なかったんだ。わかりやすく言えば、叱り、慰め、受け入れてくれた。そして…

「大事なものはこれから。罪悪感があるのなら償いを…後悔があるのなら繰り返し返さぬ努力を…怒りがあるのなら次の行動へつなげる心がけをすること。大きな禁句を犯そうとしていたら、必ず俺達が止める。だから…前を向いて生きろ」

父さんと母さんは、俺達にそう言った。

すぐに変わることはできないと思う。けど…前を向くことで、俺達や人々のためになるのなら、俺とミリアはこれからもまっすぐに生きようと強く言い聞かせた。

さあ、もうくよくよしているわけにはいかない。不良として生きる

以上、覚悟もしなきゃやっていけない。

俺達にできること、やりたいことが底をつくことなんて、ありはしない。

物語はこれからも続くのだから。

『ネイラードレポート13』

あの出来事から、俺達は不良として生きている。人々に悪さをする奴らをつぶりたり、困ってる人を助けたり、いろいろ好き勝手にやっていた。人によっては、俺達をヒーローのように言うようだけど、全然そんなことなんかない。俺達はそのために戦ってるわけじゃないから。

ある日、変わった二人の幼女がナンパされてる場面を目撃した。それが、俺達にあの学園のことを思い起こさせる。もちろん嫌だったから、いつものようにナンパ男共をなぎ倒した。全く…ナンパには困りものだよ。

嫌なことを思い出して暗い気持ちになったから、彼女達には名前だけ言って引き上げることにした。ところが、幼女達にかけた紫髪の少女が、俺達に入学の勧誘をしてきたんだ。そういえば、俺達は超次元学園の門前にいた。つまり、彼女達は生徒らしい。

だが、俺達はすでに国を1つつぶした不良…入学する権利なんてない。そう思って断ろうとした。けど、そこに理事長真王が現れて俺達が迷惑がかかるという言葉も、気持ちも受け入れられて言った。彼には、俺達の恐れも見えていたんだろう。

考えてみれば、俺達は疑心暗鬼になりかけているのかもしれない。

もし、もう1度信じて入学すれば、俺達はその疑心暗鬼から変われるだろうか？彼女…ネプテューヌ達の仲間になれば、もしかしたら…

前へ進み続けたい。それは俺達の気持ちでもあった。  
もう1度、学園を信じてみよう。答えは、そこにあるのかもしれないから。

俺とミリアは、超次元学園の生徒になってやり直すことを決意した。

今度は……きつと、大丈夫だよな？

ネプテューヌ達はきつと、あんなゲスな学園と同じなんかじゃない……俺達は、信じる。

もし、あの学園がまた悲劇を起こそうとしても、皆は俺達が守ってみせる。

巻き込ませはしないさ。』

全員「……………」

カイル「あいつら2人でかたをつける気か！」

レオン「うむ」

フェイト「ひどい、なんてことを……」

ギルシア「ケツ！反吐が出るな……」

それぞれ2人を心配し、エリート学園を卑下し、拳句憎悪を抱く。

勇華「彼らの行き先は割れているわ。どうする？」

ネプテューヌ「きまつてるよ」

超次元学園生徒全員は武器や気合いを装備して、

ネプテューヌ「友達を助けるんだ！」

目指すはエリート学園。

果たして2人は？そして生徒たちは？

銀八「へ〜い、授業を……………あるえ〜!？」

生徒全員がいなくなったことを知った銀八は生徒が出て行ってから1時間たつたらしい。

しかもその時はジャンプ読んでさぼってたらしい。

**第十訓・もう後には引けないBYカイト（後書き）**

喧嘩売っていくのは良くないけどこれは許そう



第十一訓：友の絆は壊れない（前書き）

学園戦争だ！

## 第十一訓：友の絆は壊れない

前回のあらすじ

カイトとミリアがエリート学園を破壊するためいなくなった。ネプテューヌ達は彼らを追いかける。

そして舞台はカイトとミリアにとって悪夢の思い出しかないあの学校へ。

エリート学園校庭

カイトとミリアは立派にっている学園を見て言う。

カイト「2度と見ないことにしたんだが…どうもそういつわけにはいかなかった状況だな」

ミリア「ここで本当にけりをつけよう…」

と2人は前へ進み、

アナウンス『警告シマス。エリート学園ノ許可スルモノヲダシナサイ。クリカエシマス。エリート学園ノ許可スルモノヲダシナサ…』

ガシャン！！

アナウンスをぶっ壊していく。

カイト「雑魚にかまうな。突破する！！」

ミリア「カイト君前！」  
キラーマシン「ハカイセヨ」

カイトたちの前にキラーマシンが現れた。  
さらに周りにもキラーマシンがいっぱい。

カイト「こいつらが来たところで俺らが止まるか!！」

とカイトはキラーマシンをなぎ払った。

エリート学園生徒「こいつら…、調子に乗りやがって…」

歯ぎしりを立てる生徒。

もうすでにキラーマシンは全滅した。

ミリア「これ以上ひどい目に会いたくなかったら…」

カイト「そこをどきやがれ」

2人は殺気を出す。

生徒たちはたじろぐ。

???「お前らの目的は俺のことか？」

と学園の上から男が現れた。

この男こそエリート学園理事長でカイトたちと因縁のある、

カイト・ミリア「ダヌ!」

生徒たち「ダヌ・カースター理事長!」

ダヌ「ようカイト、久しぶりだな」

カイト「ああ、むかつく学校があると聞いてぶっ潰しに来たぜ!」

ダヌ「そりゃ丁度良かった。俺もお前にリベンジを果たすつもりだったからな」

カイトとダヌはにらみ合う。

ダヌ「お前とのリベンジを果たして…ミリアをもらっつがな」

カイト「誰が渡すか!」

ダヌ「あっそ、ならば…」

ダヌが指を鳴らすと顔にバツ印の傷跡があり仏教面のスーツ姿の男たちが現れる。

ダヌ「バウンサーと遊んどけ。俺は理事長室で待ってる」

カイト「まで!」

ダヌは理事長室に戻り、カイトはダヌを追いかけようとする。

ドガッ!

カイト「ガッ!」

バウンサーに攻撃をもらった。

ミリア「カイト君!」

カイト「くっ!こいつら強い…」

ミリアは寄り添い、カイトはバウンサーをみる。

バウンサー「…波動拳」

ストファの波動拳使用のように波動拳を放つバウンサー。

カイト「こんなもんかわして…」

バウンサー「波動拳」

カイト「なっ！？ぐああ！！」

ミリア「きゃあ！！」

カイトとミリアは飛び上がると同時に3体のバウンサーがたたき落とした。

カイト「くそ……」

毒づくカイトの前には仁王立ちしているバウンサー。

カイト「…ダヌをぶっ潰すまで…終われるか！」

体を鞭打って立ち上がるカイト。

だがそれでは無理がある。

ミリア「か、カイト…君…」

カイト「絶対に…負け…るか…」

息が荒いカイトとミリア。

生徒「はっ！てめえらの負けは決まりなんだよ！」

生徒「なんか言ったらどうだ？あん？」

ドガドガドガドガ！

カイト「グッ……」

ミリア「イツ・・・」

エリート学園生徒からボコスカとリンチに会う2人。

生徒「先輩、こいつ犯しておこっぜ？」

生徒「あわてるな。まずは俺が一口いただいて」

ミリア「い、いやああ!!」

ミリアにいやらしいことをする生徒たち。

見ている生徒はにやにや笑っている。

カイト（クソオ!!こんなところでえ!!）

カイトは悔しくて心の中で泣く。

生徒が手をかけ…

????「その子から…」

????「手を…」

ビビ「離せくそ男どもおお!!!!」

エリート学園生徒たち「ぎゃああああああああ!!!!」

ようとしたところでとび蹴りを食らわされた。

蹴ったのはネプテューヌとネプギアとビビだ。

ネプテューヌ「カイト、ミリア!」

ビビ「助けにきたよミリアちゃん!」

カイト「な、何でお前らがここに!?!」

ネプギア「私たちだけじゃないですよ」

銀時「俺らもいるんだぜ?」

カイトとミリアが振り返ると超次元学園生徒たちが集結していた。

カイト「なんで…、これは俺らの問題だ！関わるな！」

ネプテューヌ「そう言われても余計関わりたくなるの」

なのは「カイト君はほつとけないからね」

真王「子供の責任は親（せうじん）ととるもんだ」

カイトは関わるなといっても聞かない一同。

ネプテューヌ「それに！カイトとミリアが2人で片をつけようなんて、そんなの私たちが許さないよ！なんたって私たちはカイトたちの友達だもん！」

カイトとミリアは驚いた。

俺らを…友達と呼んでくれるのか？

真王「お前ら。共に闘う仲間が増えるぞ」

キキ「……………！！ドガンッ！」

エリート学園生徒たち「ぎゃあああああああああ！！！！」

全員「生徒をひいたあああああああ！！！！」

突然現れた黄色くてでかいバイクがエリート学園生徒を引いて現れた。

セレナ「セレナ・アーヴェンクルス、只今参上！」

ベールゼファア（以下ベル）「恥ずかしいからやめなさい」

束「私は面白いと思うけどね」









第十一訓：友の絆は壊れない（後書き）

書いてて恥ずかしくなった自分がいる…。

なんでだ？

第十二訓：シリアスは嫌いであるBYドーン(前書き)

カイトとミリアが決着を！

## 第十二訓：シリアスは嫌いであるBYドーン

エリート学園地下研究所

????「これとこれ、そしてこっちのボタンを押して…」

ある男がボタンをいじっている。

彼の名はドーン、自称マッドサイエンティスト。

ドーン「よし！始動せよ！ドラゴンファイヤー14号！」

と龍の形をした何故か角の先の部分が足になっている赤いロボットを始動させる。

そしてエレベーターで昇っていく。

エリート学園内

カイト「邪魔だどけえ！」

ミア「くらえ！」

ネプテューヌ「キック！」

銀時「ホタア！」

エリート学園生徒「あばぎゃああー！」

ダヌのいる理事長室に向かって駆け出すカイト達。

上記5人以外なのは、フェイト、ネプギア、神楽と合計8人だ。

カイト「この先にダヌがいるはず…いくぞ！」

エリート学園・理事長室

カイト「ダヌー！ー！！」

カイトは扉にキックをかまして侵入。

ダヌ「おいこら、扉にはいるのに礼儀正しくないか？つてお前らに言っても無理か」

カイト「テメエの様な奴に言われる筋合いはない」

ミリア「同じくね」

カイトとミリアは態度のでかいダヌに睨む。

ダヌ「せっかくここに来たんだ。お前らにこれらをプレゼントしよう」

ダヌはそう言って指を鳴らす。

身体が耐魔術の特殊水晶で出来た無機質生物が現れた。

ダヌ「スピリット・クォーツソルジャー始動だ」

カイト「こいつは…」

ダヌ「どっかの誰かさんが失敗作作って俺が修理したんだよ。さて、

覚悟はいいか？」

後ずさる銀時達。

すると、

????『ドラゴンファイヤー上昇シマス上昇シマス』

どこかアナウンスが聞こえる。

バウンサー「理事長、校庭をご覧ください」

ダヌ「あ？・・・ってなんじゃこりゃ!？」

ダヌやカイト達は外を見ると巨大なドラゴンのような機械が現れた。

ダヌ「あのふざけた機械：もしやテメエか!？」

ドーン『そのとおりである』

スピーカーから男の声が聞こえる。

それはドラゴンファイヤーに乗っているドーンだ。

タバネ「わゝ、ドンちゃん久ぶりゝ」

ドーン『その声は我がライバルタバネであるか!いやゝホント懐かしいである!確かアンバリーと中学で別れて以来か?』

タバネ「そうだよゝ、今学園で化学の教師をやってるんだゝ」

ドーン『そうか。ならこれ終わったらそっちに移転していいか?』

タバネ「理事長なら許可してくれるよゝ」

全員「なんでこんなときに世間話してるんだよ!!!」

懐かし会うタバネとドーン。

レオン「それはともかく、」

ガレーナ「いい玉が手に入った」  
ドーン「え？ちよ、なにしてるであるか？」

なぜかレオンとガレーナがドラゴンファイヤーを持ちあげた。

レオン、ガレーナ「なげる！」

ドーン「ちよ、ちよつとまつでああああああああああああああ  
あああああああああああ！！！」

ダヌ「つておい！！まてまてまて！！！」

銀時「俺達を忘れてるぞオオオオオオオオ！！！」

ドゴーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

ドラゴンファイヤーが理事長室にいるダヌことぶつけた。

ガレーナ「このほうが手っ取り早い」

新八「言ってる場合か！！銀さん生きてますか！！！」

新八は銀時を呼ぶ。

で・・・

銀時「いつつ・・・あのやる本気で投げやがって・・・」

ネプテューヌ「寿命が縮んだ気がする・・・」

ネプギア「だ、大丈夫ですか？」

神楽「問題ないね」



なのは「ふええ……」

フェイト「なのは！すっかりして！」

カイト「これもいつものことなのか……」

ミリア「なんかもう慣れてきた……」

ダヌ「ぬぐぐ……（はさまった）」

ドーン「い、生きてたである！」

みんな無事だった。

銀時「まあそれはそれとして、いいか？」

カイト「ああ、ダヌ・カースター覚悟しろ」

ダヌ「ぬぐぐぬお！！（抜けた）……これで勝ったと思ったたら大間違いだ！ソルジャーはさっきので潰れてしまったがまだ……ん？」

ドラゴンファイヤー『上空に敵影反応あり』

ドーン「ん？あれは？」

そとをみると巨大な船が浮いていた。

松平『あーマイクのテスト中〜聞こえてるなら返事をしろ〜』

近藤「げっ！？あれは松平のとつつあんの船だ！！やべーよ……」この学園を消しかねえ……！」

近藤は驚く。

松平『そこにいるんだろ近藤？今からおじさんがこの学園どっか〜んつぶつとばしてやるからよお』

近藤「ぶっ飛ばすって！？俺達ごとか！？」





そこで松平があるボタンの近くに建つ。

松平「おい、これが発射スイッチか？」

部下「そうですがもう倒されたので押す必要は…」

ポチッ (いい音)

部下「・・・え？今押した？押したのか!!!？」

松平「いや、今度栗子の奴仮装パーテイ参加するからちゃっちゃと終わらせよう…」

部下共「何だつてええええええええええええ!!!??？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!

大砲の発射口にいまにも発射しそうな感じが漂う。

ネプテューヌ「あれ？あの船こっち向かって発射しようとしてない？」

真王「大方娘のことですっさと済ませようとしてるんだらうな」

銀時「言ってる場合か!!!とりあえず・・・にげろおおおおお!!」

カイト・ミリア「エ”エ!!!??？」

砲撃に巻き込まれる前にエリート学園を脱出する。  
そしてあとかたもなく学園が消滅しました。

数日後

『スクープ!!!これがエリート学園の真の姿だ!!!』

と書かれた題名の新聞を読むカイトたち。

カイト「終わったんだな」

ミリア「うん」

ネプテューヌ「カイト、今日転校生と新教師が来るよ」

とネプテューヌが言う。

銀八「お〜い席着けえ、お前たちに理事長から話があるそつだ」

生徒たちがざわつく。

真王「話といつても転校生と新しく入る教師たちだよ。まず生徒サイドから」

真王は生徒側を中に入れる。

セレナ「久しぶりかな？セレナよ」

ベル「ベールゼファーよ」

仁哉「上谷仁哉だぜ？」

虎太郎「僕は竜ヶ崎虎太郎だよ」

ハジメ「ハジメ・クレバヤシだ」

天音「出雲天音よ。よろしくね」

夢乃「寿夢乃です。よろしくお願ひします」

ユリナ「ユリナといいます」

カイン「俺はカイン、一緒に熱くなれよおお!!」  
セリア「セリアと申します」

ホラーロード「ホラーロードだよ」

エル「エルです。はじめまして」

オックス「オックスだ。よろしく頼む」

コープス「俺コープス、よろしくな」

ローグ「ローグだ」

レルシア「レルシアといいます。アンドロイドですがよろしくお願  
いします」

アギス「俺はアギス。仲良くやろうぜ？」

レイヴィス「あたしはレイヴィス。よろしく」

ベアトリス「私はベアトリスといいます」

レイシア「レイシアです」

リルマ「リルマ・ロギストルといいます」

隆次「混獄隆次だ」

ユリス「その妹ユリスです」

イヴ「ロソノアレ・イヴだよ」

龍華「さつきも言っただけど龍華だよ」

ウイエナ「ウイエナです。よろしく」

銀八「みんな仲良くするように」

これを見た生徒たちは、

ネプテューヌ「いっぱい来たね」

カイト「なぜあいつ松岡修造なんだ？」

銀時「気のせいかな？あいつ体すけてるよっな…」

プリア「アンドロイドがいるね」

プリニー「魔族も交ざってるッス」

真王「続いては教師サイドです」



な！」と言ってきたんだ」

カイト「・・・何を言ったんだ？」

カイトはまだ睨んでいる。

真王「それはな・・・」「女5人を俺の配下にさせる！」と行ってな

銀時「それで条件飲んじやったの！？やっちゃったよこの子！」

真王「まあひどかったらオカマのガチムチを出すけどな」

ネプギア「そういう問題でもありません！！」

ダヌ「そうだ！オカマはやめるよな！」

カイト「お前が口出しするな！」

いろいろとカオスな話し合いだ。

真王「まあなんにしろ人が多いほうがいいし、それに・・・..  
こんだけ楽しくできるのはほかの学園でもないぜ？」

ネプテューヌ「あ、そうか」

ネプギア「ああ、それもそうですね」

全員「ああそうだね」

カイト「うおおおおいい！！？」

ミリア「あっさり認めちゃっていいの！！？」

カイトとミリアはあり得ない納得に突っ込む。

真王「それに、なんだかんだいってお前ら楽しそうに笑ってんじや  
ん」

カイト・ミリア「・・・あ

カイトとミリアは思い出した。

この学園に入ってからあそことは違う、いや、どんな学園よりも心



が楽しいを喜んでいることに。

真王「さて、授業を開始するぞ。いいな」  
全員「はい！／おう！」

あれあれしいがいつでも楽しい超次元学園。  
今日も一日平和に過ごしていくのだ。

第十二訓：シリアスは嫌いであるBYドーン（後書き）

これ終わったらノクターン書こうかなと思う自分がある。  
タイトルは『裏超次元学園へようこそ！』。  
というわけで頼む。

邪王「あいよ」

第十三訓：もっさりブリーフは余のシンボルみたいなものだBY將軍様（前書き

今回將軍が出てくるようだ。

第十三訓：もっさりブリーフは余のシンボルみたいなものだBY將軍様

ある日銀八が少し改まった態度をしている。

銀八「え、今日あるお方がこの生徒の授業をみたいと言ってきたのですが…」

ネプテューヌ「ですが、なに？はつきり言ってよ」

銀八「わりい、では將軍様、よろしく願います」

將軍「うむ」

教室に現れたのはちよん鬚男だった。だがよく見ると服装に風格がある。

ネプテューヌ「あ、さっきの將軍様」

ネプギア「あ、ほんとです」

ほとんど「將軍様!？」

一部「？」

ネプ姉妹は知り合った経験があるらしい。

ほとんどはおどろき、一部はなんだ？と首をかしげる。

真王「初めに言っておくが失礼なことするなよ。出ないと打ち首さらしになるから」

それを聞いたほとんどは顔を青くした。

真王「じゃあ私は親友と用事を済ましてくるからな。失礼なことするなよ？もう一度言うが、失礼なことするなよ」



銀時（きを轆き締めろよ）

あんたこそ  
新八

零斗「んじゃ、王様だ〜れだ!」

手に持つくじを引く。

ドガバキドガベキ!

乱闘で。

新八（冷静にとる気さらさらねえエエエエ!!!）

欲の深いことを考えていると思われるはやてと桂とネプテューヌ、  
ビビ、咲夜。

それ故くじもバラバラ。

新八「皆さん慌て過ぎですよ。今度はゆっくりとお願いしますよ）  
今はあの欲深な奴らに取られる前に將軍を…）」

新八はくじを拾う。

新八「せ〜の!!!（いけエエ將軍!!!）」

と新八は身をのりいだして一本だけ王様くじを目立つように將軍に  
出す。

將軍は取ろうとした瞬間いつの間にかくじが消えた。  
いやいつの間にか欲深な奴らが盗ったのだ。

新八（は、早いい!くじは誰が…）

銀時「おっと、俺が王様だな」

取ったのが銀時だった。

銀時「よし、3番の奴は下着になれ」

新八（ぎ、銀さん）

銀時は新八にアイコンタクトを取る。

ここで將軍にいいとこ見せようと言うのだが、  
3番は將軍だったようだ。

銀時、新八、カイト、ミリア（將軍かよオオオオオオオオオオ！！  
！！）

4人はシャウトした。

將軍はもっさりブリーフ姿である。

銀時「（ヒソヒソ）おiiiiiiiiiiii！！なんでいきなり將軍なんだ  
よオオおお！！？」

新八「（ヒソヒソ）知りませんよオオ！！それに將軍原作と同じく  
ブリーフ姿だし！！！」

將軍「將軍家は代々、もっさりブリーフ派だ」  
カイト「おい今の話きかれてるぞ……」

將軍は耳がいいのかと思うカイト。

銀時「兎に角將軍を困らせねえようにしねえと」

ドカーン！！

新八「っていつのまにか始まっちゃってるし！！」

いつの間にかくじ争奪が始まった。

ネプテューヌ「取ったどー！」

取ったのはネプテューヌだった。

ネプテューヌ「よし、8番がこの仮面（メイドガイ仮面をイメージ）をかぶること」

新八（ネプテューヌちゃん？）

新八はネプテューヌを見ると、ネプテューヌはアイコンタクトをしていた。

新八（そうか、ネプテューヌちゃんはわざとそうやって…！）

新八は嬉しく思う。

だが仮面をかぶったのは將軍だった。

銀時、新八、カイト、ミア、ネプテューヌ、ノワール、アイエフ（將軍かよオオオオオオオオオオ！！！！）

またシャウト。

ネプテューヌ「（ヒソヒソ）せっかくいい機会作ったのにまた將軍！？」

ノワール「（ヒソヒソ）っていうかメイドガイの仮面なんてどこで売ってたのよ！？」

將軍「將軍家は代々、メイドガイの存在を知らなかった」

アイエフ「だから何で聞こえてるんですか！！っていうかどうでも



いい答えを出すな!!」

アイエフは思わず怒鳴ってしまふ。

ネプテューヌ「もしかして將軍さまいろんな意味で不幸体質持っていない?」

ネプギア「駄目だよお姉ちゃん!？」

新八「やばい!將軍様涙出ちゃってるよ!!早くしないと!」

もはや絶体絶命な予感がするこの状況。

ドガン!

ガレーナ「余が王と来たか」

新八「まだやつとんのかああ!!」

まだ王様ゲームは続いていた。

ガレーナ「うむ、では手始めに4番が学園の外を10周するのはどうだ?」

ミリア（これで將軍じゃなければいいけど…）

内容にミリアは外れて欲しいと願う。

だが案の定4番は將軍だった。

全員（結局將軍かよオオオオオオオオオオオオオオ!!!!）

校庭

警備員「今日は月がきれいだなあ」

護衛兵「このまま何も起こらなければいいがな」

警備員「そうだな・・・ん？」

將軍の護衛と警備員が外で待機していつきを眺めていると、將軍様が現れた。

もちろん下着仮面装備姿で。

護衛兵「將軍さまああアアアアアア！！？？一体何があつたんですかアアアアアア！！？」

將軍のあわれもない姿に驚く護衛兵。

その後ろに生徒達が追いかける。

ネプギア「將軍様！！待つてください！」

護衛兵「貴様らあああ！！一体何をしゃがつたんだああ！！！？」

ミリア「人には言えないことなんですうう！！！」

將軍を追いかけ、護衛達から逃げ、何とも忙しい。

ガレーナ「おい、くじを引け」

するとガレーナが隣に現れてくじを出す。

引くとそれは王様だった。

レーティア「なにをご命令しますか？」

レーティアが聞く。

ちなみにガレーナの持つくじは全部王様。

將軍はふっと笑ったあと彼らに言った。

護衛兵「んあ？戻って来たぞお！？」

超次元学園生徒達「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおお！！！」

生徒達がUターンして護衛兵と警備員達に突撃した。

ドガンー！！

どこかで爆発音が聞こえたとか。

とある高台。

將軍がそのままの格好でベンチに座っている。

その後ろにジューズ缶を持った男、真王だった。

真王「どうだった？將軍様。あいつらとの関係は」

將軍「ああ、楽しかった」

真王は“彼らの行動を知ってる”から平気な顔をしているらしい。

真王「いろいろ迷惑ばっかのは確かだが、かたくなに學術を持つよ  
りかはいいだるうに…」

將軍「一度だけわがまを聞いてくれたとはいえ、少し迷惑がかかったかもしれないが…」

真王「誰も迷惑だなんて思ってないよ。とある二人にもいったように…」

將軍「フツ、そうだな。ではまた会おう。楽しかったよ」

真王「お達者で」

將軍は去っていった。

その後、真王は彼の部下や警備員達にドンパッチやったことに呆れていたと言う。

この騒動の処理は後でチート・ザ・ハードらにまかせるのだった。

**第十三訓：もっさりブリーフは余のシンボルみたいなものだBY將軍様（後書き**

小説『裏超次元学園へようこそ!!』が更新されました。

みたいのでしたらこっちへ移動してください

<http://novel18.syosetu.com/n4617x/>

だがこれだけは言っておきます。

18歳未満はお断り！

だがそれでも見る勇気がある人はどうぞ構いません！

では！

第十四訓：暴君は恐怖を与える存在（前書き）

アナザーの『罪悪感と後悔・次戦に向けて』の続き的なものです。

## 第十四訓：暴君は恐怖を与える存在

真王「なのはが？」

ネプテューヌ「うん、それで理事長に言いに来ただけど…」

真王はネプテューヌの言葉を聞いていた。

曰く、なのはの元気が無い。

理由はある日の夜、ヴィヴィオがなのはと喧嘩してなのはは自分を責めているのだ。

そもそもの原因はアナザーサイドの『「ホラーケーキ騒動」』にある。

真王「バカ騒ぎは何時ものことだが、自分が悪に落ちるんじゃないかという恐怖感があつたら確かにまずい…」

真王はなやみ考える。

真王「・・・手遅れにならなければいいが…」

そのころのなのはは、

屋上で夕暮を見てたそがれていた。

なのは「はあ・・・」

大きなため息を吐くのは。

やはり傷は深いらしい。

????「なのは……」

そんな彼女に聞き覚えのある声が聞こえた。  
振り返るとフェイト、ヴィヴィオ、ビビがいた。

フェイト「ビビから聞いたよ。昨晚のことで悩んでるんだって……」  
なのは「うん……」

なのはのいつもの元気が無い。  
相当深刻だ。

なのは「いつもいつも二次作で魔王だの悪魔だのって呼ばれるのはもう慣れたけど、いざ振り返ってみると本当にそうだったかもしてないかな？」

フェイト「……………」

フェイトは黙る。

そんなことないと言いたかったが逆効果になると思った。

なのは「なにかれ構わず魔法でおどしてわがままふるっちゃって……私なんだかよくわかんなくなってきた……これじゃあ私魔王というより暴君だよな」

フェイト「違うー!」

フェイトが否定。そして言う。

フェイト「どういう結果にしてもなのははなのはだよ!怒って魔王って呼ばれても少しドジる事があったも、それはなのはなんだよ」



ビビ「そつだよ。鷹がそれくらいでしょげるなんてなのはちゃんらしくないよ。もっと前向きなのはちゃんがいいよ」  
ヴィヴィオ「なのはママ……」

3人は彼女を思い、言葉をかける。

なのは「……いくら言っても暴力的なことをしたのは変わらないよ」

だが3人の思いは届かなかった。  
なのははさらに落胆する。

ズ・・・

するとなのはの影がうごめいた気がした。  
それに気付いたビビは思う。

ビビ（今何か動いた様な…）

ビビはある時真王の言葉を思い出す。

真王『ハートレスは人の心の闇に反応する存在だ。闇が大きければよってくる奴等も増えるしより強いハートレスが出来ちまう。手遅れになる前に闇にとらわれた人をすぐ方がいい』

ビビ（！まさか！）

ビビが思うと案の定なのはの影から黄色い目をした蟻っばいハートレス・シャドウが現れる。

フェイト「なのは！」

フェイトは呼ぶがなのはは反応しない。  
いや、気を失っているのだ。

倒れかかるなのはをネオシャドウが抱えどこかへ連れ去る。

フェイト「なのはアアアアアアアアアアアア！」

悲鳴に近い声で叫ぶ。

だが相手はハートレス。心が無ければ感情もない。  
故に何も感じない。

ビビ「ちょー！引つ付かないで！」

彼女らにシャドウが群がる。

やがて黒い沼に引きずり込まれようとする。

仁哉「衝撃のオオオオオオ！！！カオスブレイク！！」  
竜虎「され！」

するとクライスメイトの仁哉と竜虎が現れてハートレス共を蹴散らした。

仁哉「よう、お前にしては珍しく苦戦しているな」

ビビ「うっさい黙りなさいバカヤ馬鹿。あんたもよポンコツ」

仁哉「バカヤ言うなアアアアアアアア！！後ポンコツじゃねえ！！ヴ  
エステージは俺の相棒だ！！」

ヴェステージ「良く言っただぜ！！」

仁哉とデバイスのヴェステージが講義する。

共通点はあつくるしいこと。  
ちなみに仁哉のヴェステージ起動時姿は斬魄刀みたいなかんじである。

竜虎「仁哉、まずはこの厄介者どもを追い払ってからの方がいいよ」  
竜虎が言うつと周りにはシャドウのみならずソルジャーやラージボデ  
イも現れる。

仁哉「・・・おいおい、こりゃシャレにならねえんじゃねえのか？」

仁哉が校庭を見ながら言う。

チラリとみんな見ると校庭がほぼ真っ黒。

ハートレス達が集まっている。

するとドアからリュウケンドーとマリオが現れてハートレスを撃退する。

リュウケンドー「こいつ等は闇の心を持つ者に反応してるんだ！どこかにそいつがいるはず！」

フェイト「心に闇を……」

フェイトは該当する一人の人物を思い浮かぶ。

マリオ「フェイト、知っているのか？」

リュウケンドー「いや、そう言うことか」

リュウケンドーはフェイトの反応を見て理解した。

はやて『フェイトちゃん！』

フェイト「はやて？」

はやてから念話がある。

はやて『たった今なのはちゃんの反応をつかめたで！旧校舎の屋上や！』

フェイト「わかった！なのはは旧校舎にいるよ！」

ビビ「うわ、テンプレな展開ね…」

仁哉「お前らはさきにそこ言ってる！後から来る！」

竜虎「こっちにハートレス押さえる人がいるし、あまったメンバーがそっちに向かうから…」

フェイト「分かった、気を付けて」

ヴィヴィオ「フェイトママ、頑張ってる…」

フェイトとビビは旧校舎へ向かった。

### 超次元学園旧校舎

超次元学園の森奥に立つ古ぼけた校舎。

広さ大きさは超次元学園よりも劣るが秘密の隠れ家になりやすい。

その旧校舎の前にはフェイトとビビ、銀時、カイト、ミア、アイリ、ネプテューヌら女神組、ヴィヴィオ、はやてといった一行である。

はやて「なのはちゃんはここの屋上や」

銀時「んじゃあの馬鹿を取り戻して真つ黒クロスけをぶったたくとしようや」

ビビ「ハートレスね」

ハートレスは黒が多くても真っ黒クロスけではありません。

アイリ「ご主人様、内部にザコ型100体中型20体ボス型1体があります。更にボス型の近くに生体反応があるのです」

フェイト「なのはだ！」

長い赤髪のツインテールで、スカートの短いメイド衣装を着た少女・アイリがビビに説明し、フェイトが言う。

ちなみに彼女のいきさつはアナザーの『宇宙へいざなつ者』を見れば分かる。

カイト「で？どうやっていくんだ？」

銀時「決まってるだろ？殴り込みだ」

ミア「正面突破、とも言っね」

特に計画はなかった。

とりあえず銀時達は潜伏しているハートレス達をぶっ飛ばし、屋上へたどり着いた。

フェイト「なのは！」

ドアが開くと同時に叫びフェイト。

目の前には魔方陣の中心で縛られているなのと、その周りを囲ん

で呪文を唱えているハートレス・ウィザード。  
そして三つ目の犬の顔を模した盾を持つディフェンダー。

ビビ「じゃまだってんのよ!!」

しかしビビの魔力弾が彼らを一掃、消滅させた。

ビビ「なのはちゃん!」

フェイト、銀時「なのは!」

銀時達はなのはに近寄る。

なのは? 「チカヨルナ!」

ビシャーーン!!

突然なのはが雷をおとした。

なのは? 「ケケケ! ソウダコノチカラ! スベテヲヒレフセルコノチ  
カラガアレバ・・・」

フェイト「な、なのは?」

明らかになのはの様子がおかしい。

なのは? 「イヤア! キズツケタクナイ! ワタシハイヤダ!」

なのは? 「ハハハ! テキヲツブシテオビエルカオガミタイイイイ  
!!」

なのは? 「ダメ! ワタシハコワイ! ジブンガコワイ!」

なのは? 「オソレロ! オソレロ! オソレルスガタガサラニイゼ!」

許しを請うような声と殺戮を求めるような声が交差する。

アイリ「大変ですよ！あの人は闇に飲まれつつあるですよ！」

ビビ「だっいたらやることはひとつ！」

ビビはダッシュで駆け出す。

ビビ「なのはちゃんから出て行け！」

光のこもった魔力でなのは？にぶつけた。

するとなのはと取り付いていたハートレスが分離された。

そのハートレスは縦線対称に分かれていて、

銀時たちから見て左側に悪魔のような黒いのと右側に天使のような白いのが無理やり引っ付かせたかのようなハートレスだ。

エンブレムは胸部にあり、胸部から上は首が分かれている。

カイト「な、何だこいつは・・・」

ネプギア「えつと・・・（Nギアで検索中）できました！あのハートレスは『デビジェル』といます！」

ノワール「なにその天使と悪魔を無理やりくっつけさせたかのような名前は！？」

ノワールはデビジェルの名前に突っ込む。

デビジェル（黒）「ウツセエゾゴラア！！テメエモハウゲキデクルシミタイカ！？アン？」

デビジェル（白）「ヤメテ！コロサナイデ！オネガイ！」

喧嘩売る黒い方と命乞いする白い方。

銀時「ギャーギャーうるせえ怪物だぜ。なのはを離せええ!!」

銀時は木刀を構えて振り下ろす。

デビリエル（白）「ヒィ！タスケテギンサン！」

銀時「!!!!」

銀時は怖い男に睨まれた女の子のような白いデビリエルを見てなのはと重ねてしまった。

そのせいで黒いデビリエルに殴り飛ばされた。

デビリエル（黒）「ユダンシスギダヨ！ヨクソレデマモロウトシテルナア！」

デビリエル（白）「ゴメンナサンゴメンナサイゴメンナサイ！」

けたけた笑う黒と謝り続ける白。  
どうしたものかと悩んでいると、

デビリエル（白）「ホントウハダレモキズツケタクナイ！ミンナトイッショニエガオニナリタイ！ダケドデキナイ！ワタシハキズツケチャウ！ソシテイナクナツチャウ、ソンナノイヤダ!!!!」

色いデビリエルが悲鳴をあげる。

デビリエルはなのはの心から生まれたハートレス。  
ならこれはなのはの心の悲しみというわけだ。

ビビ「くう…倒したらなのはちゃんにまで影響が出ないとは限らないし…どうすれば…」

アイリ「…せめてあいつの中に入ってなのは様を救出出来れば…」



ハートレスの中にとらわれているなのは助けたい。  
そう思っているよ、

コスモス「みんな！大丈夫！？」

ルイージの仮面ライダー・コスモスが現れる。

ネプテューヌ「あ、ルイージくん！」

ビビ「ちょうど良かった！緑！私達をあの中に入れて！」

コスモス「（緑って…）い、いや、僕にはとても「なら私達にまかせて〜」ってタバネ先生！？」

上から空中バイクに乗ったタバネとドーンが現れた。  
手には何かビームガンを持って。

ドーン「説明しよう！このデイバイドガンは合体している存在を別  
れさせることが出来るのだ！」

ネプテューヌ「えっと、つまりハートレスとなのはさんを分離させる  
ことが出来るんですね！」

タバネ「そゆこと。では喰らえ！」

タバネはデイバイドガンを撃つ。

撃たれたデビジェルの中にとらわれていたなのはと分離した。

ビビ「なのはちゃん！」

ビビは高速移動でなのはを救出。

なのはが目を覚ます。

なのは「うあ、ビビちゃん？銀さん？みんな・・・」

銀時「心配かけんなよなのは」

ネプテューヌ「そうそう」

ヴィヴィオ「ママ〜!〜!」

ヴィヴィオは多泣きしてなのはに抱きついた。

ヴィヴィオ「ま”ま”、いっじゃやだ〜!〜!」

ヴィヴィオの涙顔を見てなのははははとなる。

自分はわがママをやってきてしまった。

だがそのわがママを銀さん達やみんなが受け入れてくれていたことを思い出した。

おどした時も砲撃で黙らせても、最後は笑顔になることがあった。

なのはは涙を流す。

なのは「ごめんなさい、銀さん、ビビちゃん、フェイトちゃん、みんな、ごめんなさい、ごめんなさい!〜!」

なのはは銀時に抱きついて泣いた。

それを見たフェイトとビビはムカツつと殺意を抱く。

デビジェル（白）「ヨカツタ、モドツテ・・・」

デビジェル（黒）「ナットクイクカ!チカラヲツカエバオモイドウリニナレルハズダロ!」

なのは「それは違うよ」

なのははデビジェルに言う。

なのは「力を使ったってそれじゃあ手に入らない!けど、私もフェイトちゃん達もみんな銀さんが好きで、自分の物になりたいって思

った。けどそれじゃ只の独占だった。そして今はつきりと分かったの。いくら人を自分の物にしたいくても心を自分の物にすることはできない！」

カイト（なのは、お前…）

なのは「だから、私は私のやり方で、前へ進むんだって！」

なのはは心を開いた。

それと同時にデビジエルの体が消えていく。

デビジエル（黒）「アア、カラダガ・・・キエテユク・・・」

デビジエル（白）「アナタガココロヲヒライタオカゲデワタシタチノソソグザイモキエテイクヨウデス」

なのはの心の闇をうち払ったことでその元となったデビジエルは消える運命にあった。

デビジエル（白）（ジユウニ、マエヘイキナサイ。オノレノココロガ、トモニアランコトヲ・・・）

デビジエル（黒）「オトコガホシンナラチカラズクデヤレヨ！ジヤアナ！」

デビジエルは光とともに消え去った。

真王「心を開くか…。絆の力が光を与えてくれたようだな…」

遠くから見ていた真王はこうつぶやいた。

かくして『なのはの魔王騒動事件（仮）』は幕を閉じたのであった。

第十四訓：暴君は恐怖を与える存在（後書き）

心が開くとこういうパターンもあるんじゃないかな？（妄想）

第十五訓：修行？模擬戦？どっちでもいいだろ？BYガレーナ（前書き）

戦闘シーンです。

## 第十五訓：修行？模擬戦？どっちでもいいだろ？BYガレーナ

レオン「ずいぶん長くやってしまったな……」

幾多の修行を重ねてきたレオンが帰ってきた。

ある日カイトと模擬戦をしてカイトがまぐれがちとなった。

そのちレオンはさらなる強さを求め、山籠りで修行を重ねてきた。

レオン「そう言えば今日は……（ニヤリと笑う）ちょうどいい、修行の成果を見せてくれようか」

あることを思い出してレオンは教室へと駆け出していく。

### 教室

レオン「戻ったぞ」

ガレーナ「おお！戻ったかレオン」

レオンとガレーナは腕を重ねる。

銀時「カイトと模擬戦やってから姿が見えないなと思ったら修行してたのか？」

桜「ガンバリ屋さんなのね……」

楓「すごいですねえ……」

零斗「なるほど。ならおれもマイティ真拳を磨くとするか？」

ラム「お姉ちゃん、今日はあの日だったよね？」

ブラン「・・・あれね」

ネプテューヌ「よーし！はりきっちゃうぞー！」

カイト「っておい、あの日って何だ？今日は何かあるんだ？」

あの日という単語に転校生組は首をかしげる。

ネプテューヌ「月に一度の模擬戦だよ」

## 校庭

真王「よく集まった。これより模擬戦をおこなう」

真王や教師たちが集まって生徒たちに言う。

転校してきたカイトたちはよくわからないらしい。

真王「転校生もいるから一応説明しとこう。月に一度私が出題する模擬戦につきあい、勝っていくこと。早い話修行と思えばいいぞ」

カイトたちは少し納得する。

レオンをみるとうずうずしているように見える。

真王「ではランクを決めてくれ」

真王はランク表を出した。

『ランクE：ガーディアン×5』  
『ランクD：軍隊蜂×10』  
『ランクC：ガイアタイタン×3』  
『ランクB：ティアマト×2』  
『ランクA：リリース×5』  
『ランクS：マスタービー×5』

銀時「めんどくせえなあ……」

ネプテューヌ「よし！Aを狙うよA！」

なのは「フェイトちゃん、一緒に頑張ろう」

フェイト「うん」

椋「イメージ的にマスタービーのほうが早そうね……」

楓「き、緊張します……」

レオン「修業の成果を見せてくれよう……」

レーティア「S……はきついからAにしと」

仁哉「久々に燃えてきたぜ！」

天音「グレイお姉さま！見てますかあ!？」

ノーヴェ「スバル！今日こそは勝つからな！」

スバル「負けないよ！」

ビビ「面白そうね……」

レシア「錆にしてくれましょう」

ソラ「肩慣らしといくか」

零斗「見せてやるぜ？俺のマイティ真拳を！」

フウ「が、頑張ります！」

ステラ「ふくん？楽しそうね」

カイン「ワクワクするな！」

レルシア「準備完了です！」

レイヴィス「やってやるぜ！」

ベアトリス「参ります」



それぞれヤル気を出したりしている。

カイト「俺らは…Sを狙ってみるか」

ミリア「良くわかんないけどやってみることはあるね」

カイトとミリアはランクSのマスタービーとの戦いを始めるつもりだ。

だがマスタービーの強さがどんなものなのかはまだ知らない。

真王「準備は出来たか？出来てないならお気の毒」

ビューーーーーー!!!!

カイト、ミリア「!?!?」

風を切るような音が聞こえたので2人はとっさにかわす。

見上げると白銀に輝く体にギラリと光るお腹の針。

全長は2、3メートルあるそれはマスタービーと呼ぶものだった。

カイト「あれがマスタービー…」

ミリア「強そうだね…」

レオン「見た目で判断すると後が怖いぞ？なんせやつは最高速度が音速クラスだからな」

2人は驚く。

マスタービーの最高速度は音速ぐらいのスピード。  
ならばそれに対抗するには、

レオン「隙を見て一撃を与えることだ！」

レオンの掛け声とともにマスタービーを攻撃。  
マスタービーは大木にまで吹っ飛ばされ、そして消えた。  
仲間が倒されたほかのマスタービー達は2体ずつレオンとカイミリ  
メンバーに襲う。

レオン「さあ、修行で積んだこの技を見せよう」

そういつと突きを出すような構えをとる。

異変に気付いたマスタービー2匹がレオンに攻撃。

レオンは傷付きながらも耐える。

レオン（まだまだ、やつらがタイミングよく一点に集まった瞬間…）

レオンが耐えながら集中するとマスタービーが一点に集まって、

レオン「！そこだ！重剛破斬！…！」

一撃を放ち、錐揉みに飛ばされるマスタービー2匹。

壁に激突した2匹はそのまま消滅した。

カイト（あれは確か俺の魔王七連衝と似ているな…。もしかしてそれを参考に？）

カイトはレオンを見てそうおも…

ミリア「カイト君！」

カイト「！？ゲッ！」

カイトは油断してマスタービーに攻撃を受けてしまった。

カイト「この！」

カイトは剣を振るもマスタービーにとっては遅い攻撃。なんと振っても軽くあしらわれている。

ミリア「バーンストライク！」

ミリアが遠くで魔法を放つ。

その炎はマスタービーに直撃…

カンカンカン！

…しなかった。

ミリア「はじかれた！？」

レオン「そいつらの皮膚は対魔法反射が備わっている！やるなら物理攻撃でやれ！」

カイト「そうか！なら！」

カイトは瞬時に近づいてマスタービーを捕まえる。そしてそのまま地面にたたきつけた。

カイト「ミリア！」

ミリア「うん！」

ミリアは雑刀を持って最後のマスタービーに接近。そして空中に飛び上がる。

ミリア「流星竜撃！！」

集めた気を槍に変え、マスタービーに向かって投げる。  
マスタービーに直撃後爆発を引き起こした。

レオン「やるなカイト」

カイト「レオンさんこそ」

カイトとレオンはハイタッチした。

そのあとなのはやはりというべきか砲撃でぶっ飛ばしたり、レイティアやビビやアイリはあまり見せられない行為をしたり、零斗がハジケしたりセイタが気絶したり椀がどSになったり沖田が土方に攻撃したりネプギアがなぜか近藤（に見える武器）を武器にしたりとほとんど合格した。

真王「今日の模擬戦はここまで。では」

第十五訓：修行？模擬戦？どっちでもいいだろ？BYガレーナ（後書き）

なめ猫さんが考案してくださった新技を使ってみた。

第十六訓：男と女って互いに優越感を求めている事もある（前書き）

ちよつとした裏劇場。

## 第十六訓：男と女って互いに優越感を求めている事もある

超次元学園の夜。

普段ならもう消灯時間なのだが、生徒達が部屋にいない。するとある影が部屋を走っている。

ごく普通の男子生徒だ。

周りをきよろきよろして誰もいないことを確認すると、ある部屋の扉にこんこんとノックする。

????『合言葉を言え』

扉から合言葉を要求される。

男子生徒「紳士男万歳！」

????『よろしい』

男子生徒が合言葉を言うと扉が開く。

そして中に入った後目の前に超次元学園男子生徒達全員が集結していた。

しかし銀時やギルシア達のようなやつらはいない。

????『我が同胞諸君！良く集まってくれた！』

その声を出したのはポツサリした茶髪でイケメンに相当する顔立ちの男。

雄大「俺の名は雄大！この“男の紳士軍団”略して“OSG”の総隊長である！」

威厳がたっぷりあるような声でいう。

雄大「そして俺に右腕達を紹介しよう、まずは右から順に力自慢は俺の流儀！鉄破！」

鉄破「任せろ！」

黒の短髪でかなり鍛えた体を持つ男性生徒。

雄大「次は俺の頭脳が天下を取る！ルーシュ！」

ルーシュ「フン・・・」

見た目コードギアスのルルーシュみたいな男子生徒。

雄大「可愛い男の娘！レイ！」

レイ「か、可愛いって言わないで！」

見た目が女の子に見える蒼髪の男の子（生徒）。

雄大「最後に女は俺の前でひれ伏せ、殺樹」

殺樹「ふん・・・」

左目に眼帯をつけた黒い髪の男子生徒。

雄大「そして俺を入れて五人そろって」

レイ「すみませんリーダー！。それはいささか危ない発言かと・・・」

何処そのレンジャーみたいな決め台詞を言いかけた時にレイが突っ込む。



雄大「・・・というわけで俺達OSGと男子全員による会議を始め  
る」

雄大達が真剣になる。

雄大「だがその前に確認を取りたい。お前達！俺達にとっての敵は  
誰だ！」

男子組「この学園の女子達だああ！！！！」

雄大が言つと男子生徒達が叫ぶ。

雄大「そう！俺達の最大の敵は女子の連中だ！女がいいように上か  
ら目線で虐げられることは許せるかあ！！」

男子組「許さん！！」

一部「ぼ、僕はいいかも・・・」

一部変な奴がいるが一切スルー。

雄大「というわけでルーシュ、なにか作戦はあるか？」

ルーシュ「いくつかは案をたてているが、情報が少ない。隠密員を  
女子側に送ったからそこで作戦を考える」

鉄破「突撃なら得意なんだがな」

ユウ「やっぱ鉄破君はそれだね」

殺樹「あの女諸共自爆すればいいだろう？」

男組は作戦を話し合った。

その様子を観察している人物がいるのを知らずに...

ところ変わって別の場所

????「フフン、全員集まったみたいね」

真紅で癖っ毛のついたロングの女子生徒が周りを見て言う。  
周りにいるのは全員女子だ。

理奈「私の名は理奈！我々“可憐なる乙女戦隊”略して“KOS”  
の総隊長よ！」

女子生徒達はおおーと言う。

雷華「よう、あたしは雷華、派手にやろうぜ？」

閃乱カグラの葛城と似ている女子生徒。

メリアーナ「科学組のメリアーナですわ」

同じく閃乱カグラの春花と似ている女子生徒。

麻梨乃「えっと、麻梨乃といいます」

眼鏡で星の髪飾りをつけた茶髪の女子生徒。

殺那「私は殺那、どんな声で鳴いてくれるのかしら？」

緑色の髪で短パンとボロ着いた胸当てをきた女子生徒。

理奈「そして五人揃「すいません、そのネタはやばいです」・・・  
というわけで我々KOSと女子全員の会議を始める」

男子とやりとりが似ている。

理奈「で、現状は我々が有利を持っているとしても油断はできない  
わ」

麻梨乃「確かにあっちにも参謀キャラはいますよね」

殺那「あなたも参謀でしょうが」

雷華「なんか思いついたのがあるのか？」

メリアーナ「こう言うのはどうでしょうか？」

女子グループも作戦会議を始めた。

そしてこちらにも隠密している奴が…。

そしてそれぞれの隠密員が戻ってきた。

男子隠密員「ただいま戻りました」

雄大「どうだ？向こうは何をやっていた？」

女子隠密員「情報を入手しました」

理奈「でかしたわ！それで一体相手はどうするの？」

隠密員はほぼ同時に言った。

隠密員「まったくもってこちらと同じやり取りやってました」

ガシャアアアアアアアアアアアアアアアアアン！！！！！！

両チームがそろってずっとこける音だった。

全員「なんじゃそりゃああああああああああ！！！！！！！！？」

そして叫ぶのも同時だった。

・・・つーか仲良くねえ？

**第十六訓：男と女って互いに優越感を求めている事もある（後書き）**

ちなみに彼等はネプテューヌ達のクラスとは仲良しです。

第十七訓：奪われたら奪い返せ（前書き）

とある映画をモチーフに描いてみた。

## 第十七訓：奪われたら奪い返せ

とあるカジノ

男「やつらをとらえるー!!」

男の集団がわらわらと集まっている。

カジノの金が泥棒されているのだ。

男たちは犯人を追いかけるために車で追いかけようとするが、

パキエツ

男「へ?ぎゃあああああ!!」

車が中途半端に壊れた。

それも一台だけじゃなく他のも。

最後の車は無事……ではなく時間差で壊れた。

ふたの中に『ごくろうさん』とむかつくイラスト付きで張られていた。

とある高速道路

????「アハハハハハハハ! いっぱいたまったね」

????「ああ、ナンバー不揃いで五十億あるぞ。札束のシャワーだ  
」!





とアンバリーはミニカーの屋根を開けて偽札全部風に流す。

次元「クツソー！勿体ねえけどこの野郎！」

次元も偽札を外に放り出す。

偽札は空彼方へ舞っていく。

とある国・カリストール

人口は少ないが、独立国家が作り出した国。

銀八「はい、ちゃんと持ち物とジャンプもったか？」  
なのは「先生、ジャンプ関係ありません」

その場所で超次元学園の生徒たちが修学旅行で来ている。

カイト「で、これでよかったのかな？」

ミリア「理事長も気を利かせてあげただけだね」

カイトとミリアが少し不安ガチに言う。

実はとある日に松平の娘が男と接触しているとの事でそいつを抹殺して来いと言われた。

抹殺はまずいのでとりあえず捕まえることに承諾し、理事長に相談すると簡単に承諾してくれた。

そして着いたのがここ、カリストール国である。

そして今から解散となり、カイトとミリアは町外れの道にいる。  
2人だけでなく、銀時、ネプテューヌ、新八、神楽、ネプギア、ビ  
ビといった8人グループだ。

(ラバーズは選ばれなくて悔しがっていた。)

ビビ「で？ミリアちゃんたちはあのむさおっさんの依頼受けて栗子  
ちゃんを探してるって？」

ミリア「むさおっさんって……まあそうだけど……」

ミリアは苦笑いしながらも言う。

ネプテューヌ「でも何処にいるんだらうね？」

ネプテューヌがきよろきよろしていると、ミニカーの屋根で寝てい  
る女性とパンクしたタイヤを入れ替えている男がいた。

ネプ姉妹には見覚えがあった。

ネプギア「アンバリーさん？」

アンバリー「ん〜？あ、ギアちゃんたちじゃ〜ん！」

首をこっちに向けて言うアンバリー。

ネプテューヌ「何やってるのこんなところで？まさかまたコソ泥っ  
てるの？」

アンバリー「失敬だね？悪道を進むためなら何だってするんだよ」

カイト「…誰だこいつ？」

ネプギア「マダム・アンバリーさん。タバネさんのライバルだそう  
で悪の科学者だそうです」

ミリア「悪の？」

ネプギアはアンバリーについて説明する。

カイト（なるほど、やはり俺はこいつを好きになれないが………嫌いにもなれないな）

カイトはそう思った。

キュルルルルルル！

とタイヤの音が聞こえた。

見ると黒いリムジンがとおっていった。

中に松平の娘・栗子と少女が映っていた。

次元「何だあれは？」

アンバリー「そんなことより乗って！ぶっ飛ばすよ！！」

次元「ちょまうおお！！」

なんか面白いことを思いついたのか車をターボダッシュで発車させた。

いつの間にかネプテューヌ達が乗り込んだ。

アンバリー「あれ？何でいるの？」

ネプテューヌ「何するかわからないから見張らせてもらっよ」

次元「ケツ、巻き込まれても知らんぞ」

アンバリー達はリムジンを追いかける。

次元「で、どっちにつくんだ？」

アンバリー「女の子2人！」

次元「だろっな」

カイト「普通そっちだろ」

使い捨てのたばこを吸う次元。

そしてリムジンに追い付く。

アンバリー「タイヤだよ」

次元「おし」

次元は屋根からタイヤを狙撃しようとする。

アンバリー「でもその前にだれか突撃すればあの2人助けられるかも」

ネプテューヌ「だったら私に任せて！」

アンバリーがストップをかけ、ネプテューヌが名乗り出る。

そして屋根に立って居合切りの構えをとる。

スッパーン！！

と遠距離だがリムジンの屋根を切り剥した。

ビビ「次は私、ベ아트！」

ベ아트「まかせろ」

ビビは愛機<sup>デバイス</sup>ベアトリーチェを出して栗子と少女を奪い返す。

次元「んじゃあばよ」

次元はタイヤを打つ。

バランスを失ったりリムジンは壁にぶつかり事故した。

栗子「ありがとうございます。さらわれて身代金取られたらどうしようかと思っただであります」

カイト「例には及ばないさ。おれたちはあんたの親父さんから依頼を受けてここに来たんだからな」

栗子「そうでございますか。・・・あ、帰りどうしよう」

アンバリー「その辺はあっちに連絡したから」

栗子「それなら安心でございます。では」

栗子はお礼をいって去った。

カイト「それにしても、この子は何だ？」

ネプギア「見たところお姫様に見えそうですが・・・」

栗子と同じく捕まった少女を見て考えていると、少女が目を覚ます。

????「・・・？」

ネプテューヌ「あ、気がついた？」

少女「あ、あなたたちはいったい・・・キャ！」

ネプテューヌ「わ！危ない！」

少女が後ずさりして後ろのガードレールに引っかかってしまい崖から落ちそうになる所をネプテューヌが捕まえるが、

ドゴスツ！

ネプテューヌ「ブヘッ！」

結局落下した。

ちなみに少女は無事だ。

少女「あ、ごめんなさい。大丈夫ですか？」

少女は揺さぶるがネプテューヌは気絶している。  
すると船がやってきた。

船にはリムジンに乗っていた仲間がいた。

こいつは……それなら  
少女

少女は着けていた手袋をはずし、ネプテューヌの頭に乗せるとどろろかへ逃げた。  
船もそこへ追いかける。

銀時「おいネプテューヌ！無事か！？」  
ネプテューヌ「……………あいつ〜」

銀時たちが下りてきた。

ネプテューヌ「あたたた……………あの子は？」  
次元「あれだ」

次元が指差す先には離れていく船。

ミア「あ、連れてかれちゃった……」  
ビビ「ならたすけ「やめなさい」ギブギブ！アイアンクローはやめて！」

ネプテューヌ「……………あれ？」

ネプテューヌは手袋の中に指輪を見つけた。

ネプギア「指輪？」

アンバリー「銀のゴードの指輪だね」

銀時「ゴード？」

カイト「何だそれは？」

銀時とカイトは問う。

アンバリー「その質問はある場所についてからね」

**第十七訓：奪われたら奪い返せ（後書き）**

少女は一体何者だろうか。

次回を待て！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3269w/>

---

超次元学園へようこそ！！

2011年10月19日07時10分発行